



未来の扉

2013/03 Tetsu-Sabi
KAWORU × SHINJI
EVANGELION fan book

設定

- テレビ版・旧劇・新劇を軸としたパラレル漫画です。
- エヴァのない世界
- カヲル君が人間
- キャラの年齢操作あり

- 前作「進みはじめたぼくらの時間」から7年後のお話です。
話自体が引き続いてるわけではないので、単体でも読めるかと思います。

前回のあらすじ

人間として、生れ落ちたカヲル、
エヴァのない平和な世界で幸せに暮らすシンジ。
カヲルの生きる理由であった、
自分がシンジを幸せにするという理由がない世界で
どう生きていけばいいのか、
自分はシンジに必要なのかと悩む。

しかし、カヲルに生きていてほしいというシンジの
願いに気づき、人間としてシンジと一緒に生きることを
見つけた。

君の傍に居たい

僕がこの世界で
見つけた願い事

僕の幸せ

それだけで僕は
誰よりも幸せな人間になれる

そう…思っていた



でも
本当に？

本当に君は
それだけでも
いいの？

それだけで
幸せなのかい？







アスカ!
久しぶりだね
いらつしやい

コーヒーとあと
サンドウィッチ
お願い

了解
ちよつと
待っててね



相変わらず
すごい人気なのね
あいつのピアノ演奏

今となつては
この店の看板でも
あるからね
毎週金曜はいつも
弾いてくれるんだ

音楽は誰かに
聴いてもらうのが
一番いいからって
カヲル君も
言ってくれてるし

今日が金曜日
だつてこと
忘れてたわ
覚えてたら
来なかったのに



だが
彼のおかげで
この時間は
ほぼ満員御礼だ

店長としては
感謝しているよ

こんばんは
式殺君

あっ
こんばんは...





ありがとう

じゃあ
カヲル君のも
コーヒー淹れるね



あんな
古いピアノにも
役目ができて
私は嬉しいよ

そんな
人前で弾くのは
貴重な経験
ですから

そうか
どうだね
君もケーキ

それでは
お言葉に
甘えて…



な

なんか
照れちゃうな…



シンジ君の
淹れてくれた
コーヒーは
絶品だからね



いや別に
金曜に来るなんて
珍しいなって

私だって
今日が金曜だって
わかってたら
来なかったわよ！

相変わらずだね
君は。

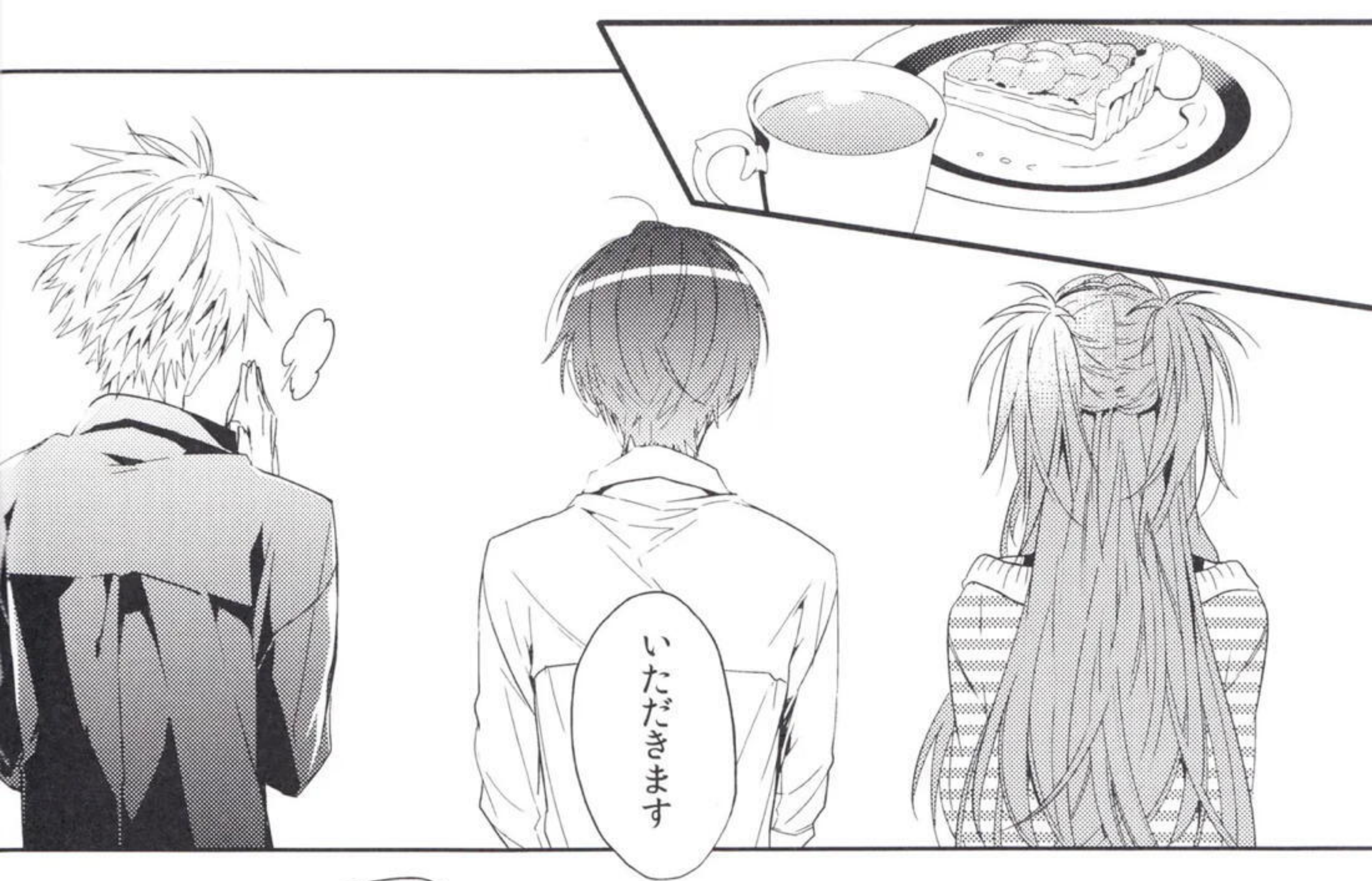
どういう意味よ！



おや？

君も
来てたんだ

何よ
居ちや悪いの
かしら





カヲル君は
最近どうなの？

音大って
やっぱり普通の
大学とは
違うんでしょ？



僕は……まあ……

ボチボチかな

君とこの世界で再会して
約10年



やっぱり
プロのピアニスト
目指すんでしょ？

どうかな……
そうなれたら
いいけど

僕みたいな人間は
沢山いるからね……



あんなに
人の心を
動かせるような
演奏が出来るんだもの

きっと
凄いだろ

僕にとって一番の
大切な友達

そんなことは
ないさ……
まだまだだよ

変わらないもの

そんな……
もつと自信もって
いいと思うよ

僕は
君のピアノ
好きだよ



君に
そう言って貰える
だけでも嬉しいよ



君の傍に居たいと
願いつけた
親友としての
君と僕との距離



それにどこか
もどかしさを
感じたのは

いつからだろう...

いや...
もしかしたら
初めから...

僕は君の事を...



4月
第壹中学校入学式

この学校に
君は居るだろうか…

君に
逢うために
僕はここに来た

この世界に
生れ落ちて
いまだ出会えていない
僕ら

人間の幼い僕が
君を探し出すには
限界があった

そもそも…
生まれた国も
過去の君が居た世界
の場所とは違っていたから

早く君に
逢いたかった

かつての世界と
同じ場所
同じ学校

これ以上
僕は待てなかったんだ

日本に移住するために
両親には散々
我儘を言って
しまったけれど

もしかしたら
君はここに
居るかもしれないと

一縷の望みをかけて
僕はここに来たんだ

緊張
してきました。

なかなか
見えないな

1-Aクラス

渚カヲル

1-Aか

彼の名前は…?

駄目だ…

近寄れなくて
見えないや

君を一目見たい

君は今幸せ?
ちゃんと笑えているのかい?

それだけが
ずっと気がかりだった

仕方ないね…
時間はまだ
沢山ある…

あとで確認
すればいいか…



この…声…

たぶん
一年生だよな？

僕も
今日から
一年生なんだ！

シンジ君…

1年の教室はね
別の棟にあるんだよ
僕は職員室に
用事があったんだ

よかつたら
一緒に行こうよ

……う、うん

あの…

話さなきゃ…

何か
言わなきゃ

もしかして
気分でも悪いの？
保健室行く？

ちが…！
そうじゃないんだ

大丈夫

ずっと
逢いたかった君が

目の前に居る

心臓が
破裂しそうなくらいに
脈打って…

目の前の子は
きっと彼だ…！

外の掲示板は
見れたよね

クラスは
どこだった？

えっと…
Aクラス…

Aクラス！
じゃあ僕と
一緒だよ
よかった

そういえば
自己紹介が
まだだったね

僕は
シンジ

碇シンジ

うん
知っているよ

僕は…

僕はずっと前から
君を知ってる…



渚カヲル

カヲルって
呼んで

カヲル君…

この手だ…
僕がずっと
触れたかった手…

僕も
シンジでいいよ

嬉しいな
さっそく友達が
できるなんて！

僕もだよ

友達

君との出会い
触れ合えた喜びが
胸をふるわせる

早鐘のような鼓動が
君にも聞こえて
しまうんじゃないかと
思うほどに

どこの小学校から
きたの？

僕は3月まで
ドイツに
居たんだ

すごいな
なんて
言うんだっけ…
帰国子女？

すごくないよ

僕の友達にも
ドイツから来た
幼馴染の女の子が
いてね…

きつともう
最初から僕は
君の事を

友達以上の目で
見ていた

この心臓の鼓動が
嘘でないのなら…



最初は…
傍にいられるだけでも
よかった

でもそれから…

人としての欲が
そうさせるのか…

その思いは降り積もって

一線を越えたがっている

この思いを明確にできる
何かが欲しい



今の状態に
満足できない
自分が居て

もどかしいという
思いがあって…

それでも
越えられずに



一定の
距離を保ったままの
君と僕



苦しくて
恋しくて

虚しくて
寂しい

この思いを伝えたい
そう…思うのに…

もし
この気持ちを君が
受け入れてくれなかったら

きっと僕は
どうしようもなく
なってしまうから…

ご馳走様でした

どうかね
新作のケーキは
いけそうかな？

とても
美味しかったです
コーヒーより
紅茶があうかも

そう？
私は別に
コーヒーでも
いいけど

そうか
よかったら君にも
レシピを
教えておこうか

是非
お願いします！

気遣いはいらんと
いつも
言っているだろう

むしろこっちが
助かってるくらいだ
また気が向いたら
演奏頼むよ

シンジ君も
君がいると
いつも以上に
嬉しそうだからね

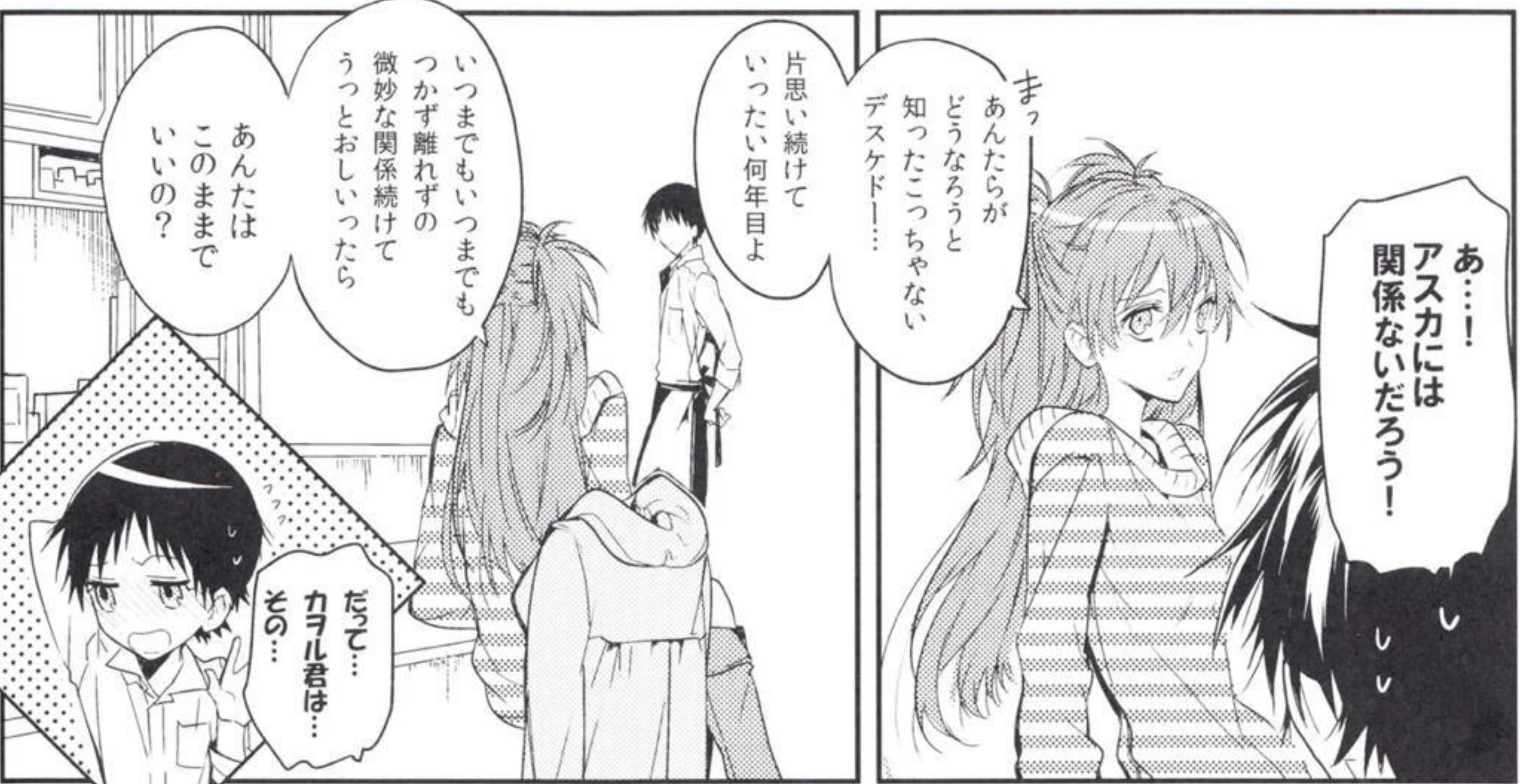
ちょ…！
ちよと冬月さん！

さて…
僕はこれで
おいとまします
お勘定は…？





まだ告白してないの？



あ……！
アスカには関係ないだろう！

まっ
あんたらがどうだろうと知ったこっちゃないデスケドー……

片思い続けて
いつたい何年目よ

いつまでもいつまでも
つかず離れずの微妙な関係続けて
うっとおしいたら

あんたはこのままでいいの？

だって……
カヲル君は……
その……



カッコイイし綺麗だし
ピアノも素敵でなんでもできて

モテるし他に好きな子居るかもしれないし
そもそも僕は男だし……

男に綺麗ってなんか
キモチワルイ

あいつの顔面偏差値の高さは認めるけど

それにね……

僕の思いを
告げたら…

カヲル君に
その気はなくても
僕の気持ちを無碍に
出来なくて

きっと
断れないと
思うんだ…
カヲル君は優しいから

だから
僕は今のままで
いいんだよ

それって…
あいつの重荷に
なりたくないって
こと？

うん…

カヲル君自信が
やりたいこと…

夢だってあるのに

それを妨げるような
事はしたくない

進路希望調査書

大学進学者は進路希望大学を第3希望まで書きなさい

高校のときにね
言ってたんだ

僕決めたよ
音大に行って
ピアノの勉強を
しようと思うんだ

ピアノ？

僕が将来
やりたいことを
考えたら
これが一番近いような
気がしてね

いいね
カヲル君のピアノは
人の心を動かす音がする

僕も君のピアノを
もつといろんな人に
聴いて貰いたいな

君のピアノ
大好きだもん

そう思えたのは
君のおかげだよ

僕の？

君が
僕のピアノを
好きだって
言ってくれたから

ピアノが好きに
なれたんだ

そうなんだ…
嬉しい

君に好きなものが
増えて
すごく嬉しいよ



僕も
うれしい…

進路

大学進学は進路

僕は
カヲル君の夢
精一杯
応援するからね



ふーん…
あいつにも
夢があったとはね…

だからね
この思いは
伝えなくても

彼の傍で
ちよつとでも支えに
なれるだけ
僕は満足なんだ

伝えてしまったら
彼は無理もするし
無茶もする

そんなの
僕は嫌なんだ

あいつの世界には
シンジしか
いないと思ってた

は…



臆病者



そんな戯言いって
あんたはただ
怖いだけ

拒絶
されるのが

それとこれとは
関係ないでしょ
答えを決めるのは
アンタじゃなくて
あいつ



そう…

だよ…

でも



バカシングジの
気持ちには
わからなくもないわ

誰だって怖いわよ
他人に自分の素直な
気持ちを伝えるのは…

私だって…

私だって…
本当は…

アスカ？

とにかく！

私が言いたいのは
今のあんたは
すこく臆病で
男らしくないってことよ！

わかる？

う…うん

わかればいいのよ

フイツ

ほんともう
くつつくなら
さっさとくつつき
なさいよね

そんな
辛気臭い顔
これ以上
見せないでくれる？

ありがとう…
アスカ

やだ
もうこんな時間
ママに怒られちゃう

お勘定おねがい

いいよ
今日は僕のおごり
話聞いてくれた
お礼に

そう。
ならお言葉に
甘えるわ

また来るわ

バカシンジ
だけじゃない…

私だって同じよ

臆病なのは…

シンジ君今日も
お疲れ様
そろそろ
上がっていいよ

はい！

男らしくない…か



たしかに…
アスカの言うとおり
かもしれない



カヲル君…

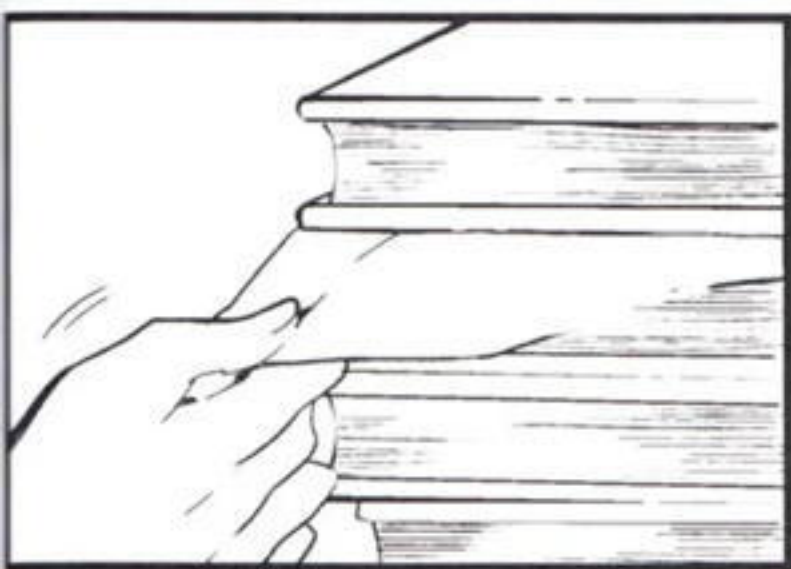
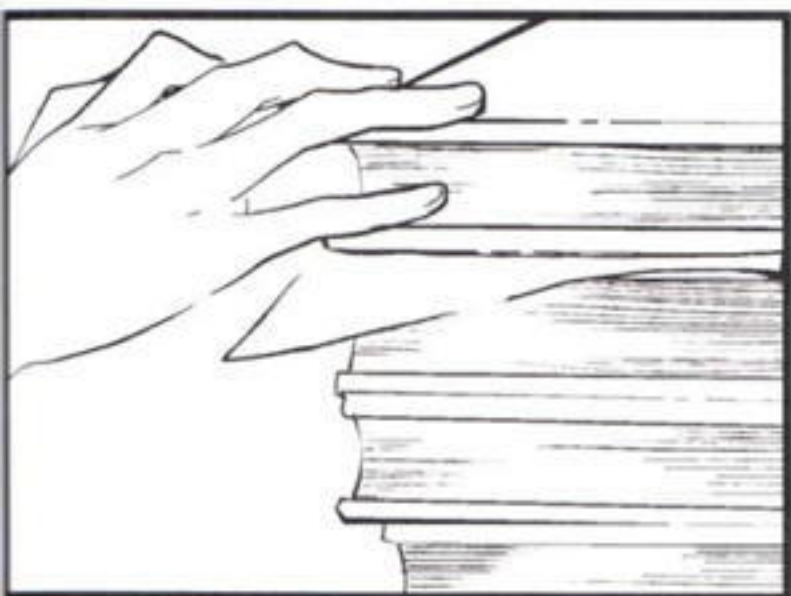


今度会ったら
伝えてみよう

僕の本当の気持ち



よし！
男は当たって
砕けるだ！



ウィーンか…

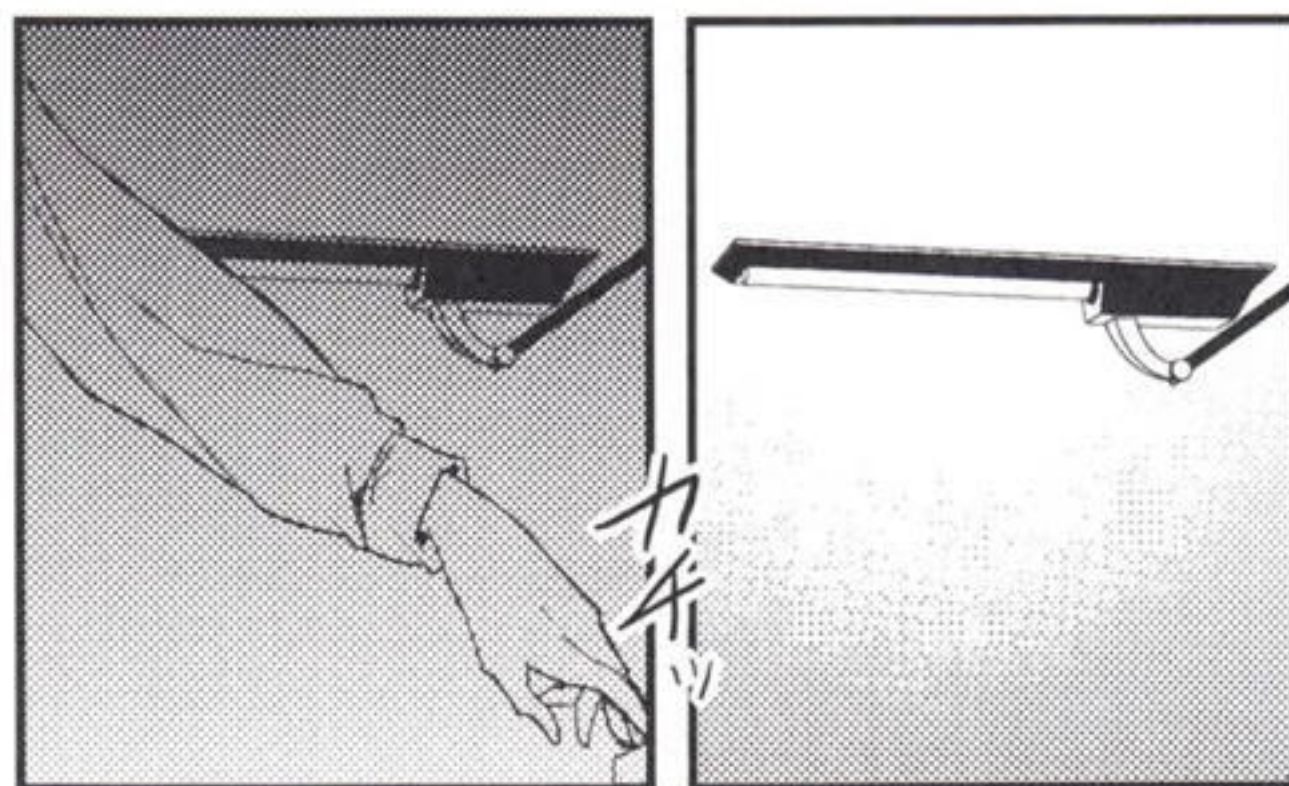
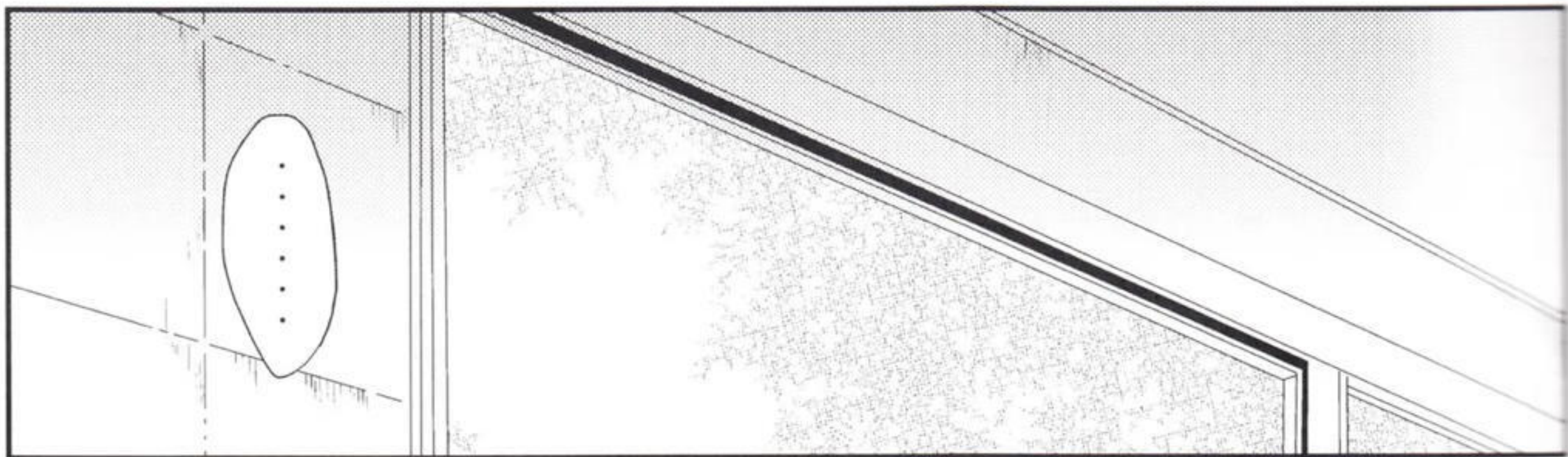
最優秀賞受賞者につきましては、
海外留学全面奨励など、音楽活動



ウィーン…
オーストリアですか

君のピアノの才能は
すばらしい
ここに行けば
もつといい教育と
いい音楽にふれあえる

よかったら
考えてみては
くれないか？





向こうに
行ってしまえば

きっと
君と僕との距離は
逆戻り

シンジ君への思いも
宙ぶらりんのまま
放置してしまう
ことになる



君に伝えていない
思いと…

僕は
どうしたいのだろう

僕の将来



近くの
ファーストフード店で
済ませる
気分じゃないし



何も無いや…



おなかすいた…





それでね
聞いてよ

そうよん
久しぶり

確か先週まで
新婚旅行に
行ってたんですよ?

加持ったら
途中で財布
無くしちゃって
大変だったのよ



え!?
大丈夫だったん
ですか?

無いな、無いな、って
思ってたなら
最終日にトランクの底に
入ってたの

こちら、
盗まれたんじゃないかって
カード会社に電話して
カード止めたり
大慌てだったわよ
バカよね

何事もなくて
よかったです



こんばんは

やあ
シンジ君

ミサトさんに
加持さん!
お久しぶりです



あゝっ!

その葛城っての
やめてって
言ってるでしょ



………



おい
葛城……

その話はもう
蒸し返すなって

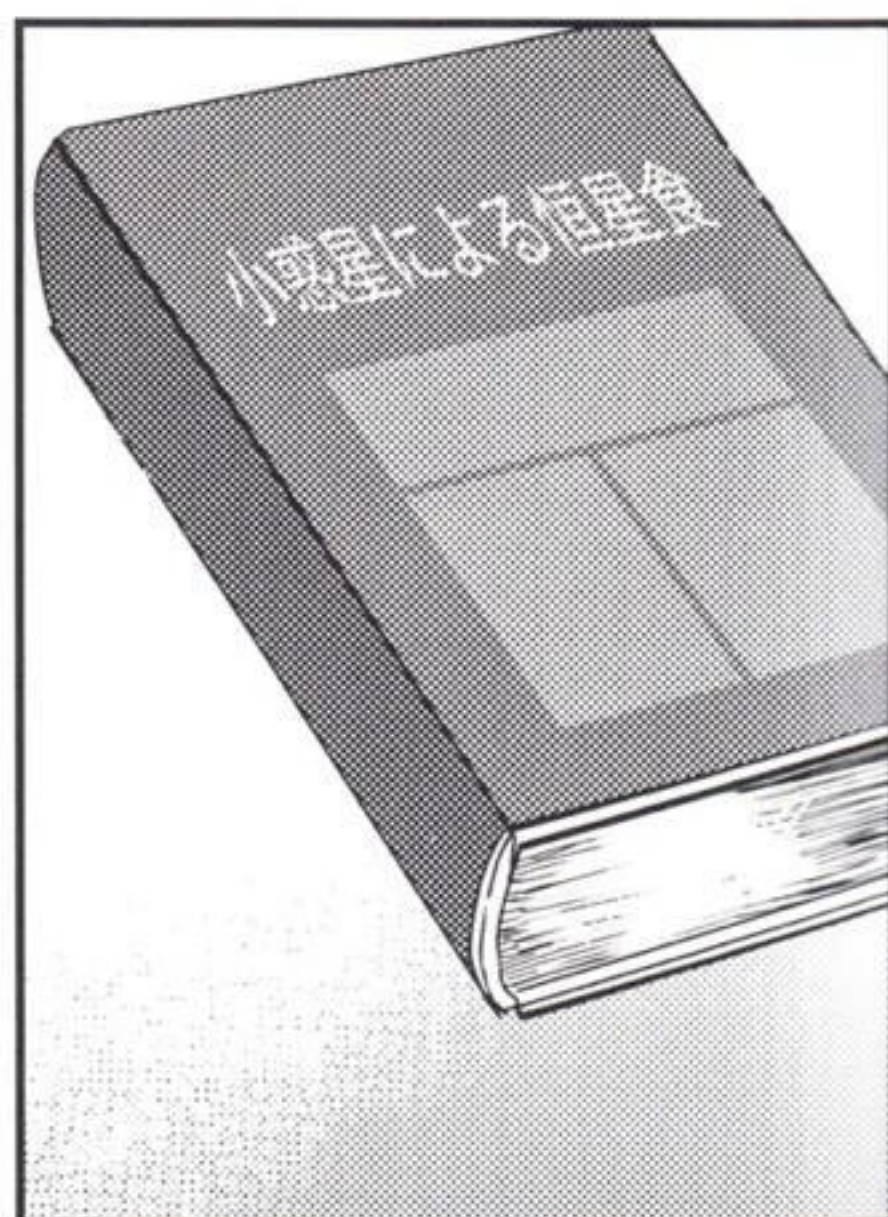
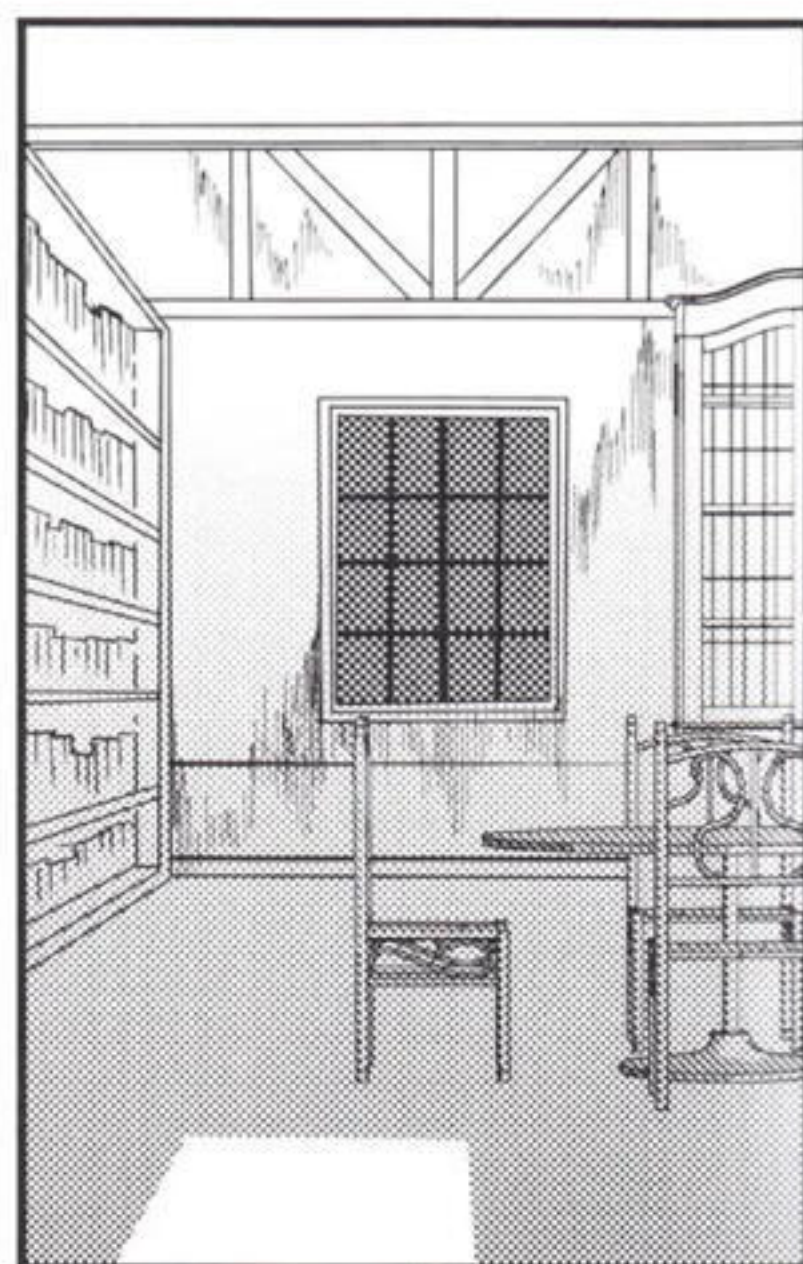
フホン













ここに
来るって…

でもまだ
来てないし…
メール届いたのも
一時間前…

何か
あったのかな…?



さっきのお土産も
あるし
バイト終わったら
会いに行ってみようかな

もしかしたら
ピアノのレッスンで
忙しくなっちゃった
のかも

それで会えたら…



今度こそ

君に…



君が
好きだって…

伝えてもいいかな



消えない…



僕以外のリリンに
触れられてる君が

頬を赤らめた
君の表情が

消えない…



あんなの
ただの戯れにすぎない
分かっているのに

心が…
酷く気持ち悪い
吐き出したい



これはリリンの言う
嫉妬だ…



だで
僕にはずっと
君だけだったから

ずっと

ずっと

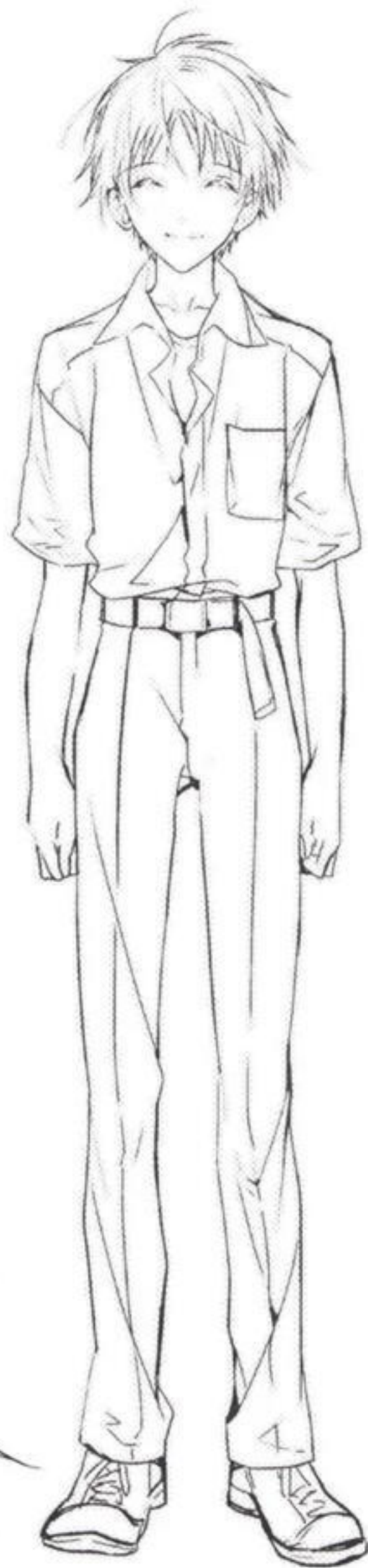
ずっと…



君は僕を
一人にしないって

一緒に居てくれるって
言ってたじゃないか

どうしたら
君の心の
一番近くに
居られるの？



僕以外の
誰かと触れ合う
シンジ君…

僕以外の誰かと
幸せになる
シンジ君

そんなの
絶対に嫌だ…！

僕を幸せに
できるのは…

君しかいないのに

それでも…
もし君が…

僕から離れてしまったら…

僕は…

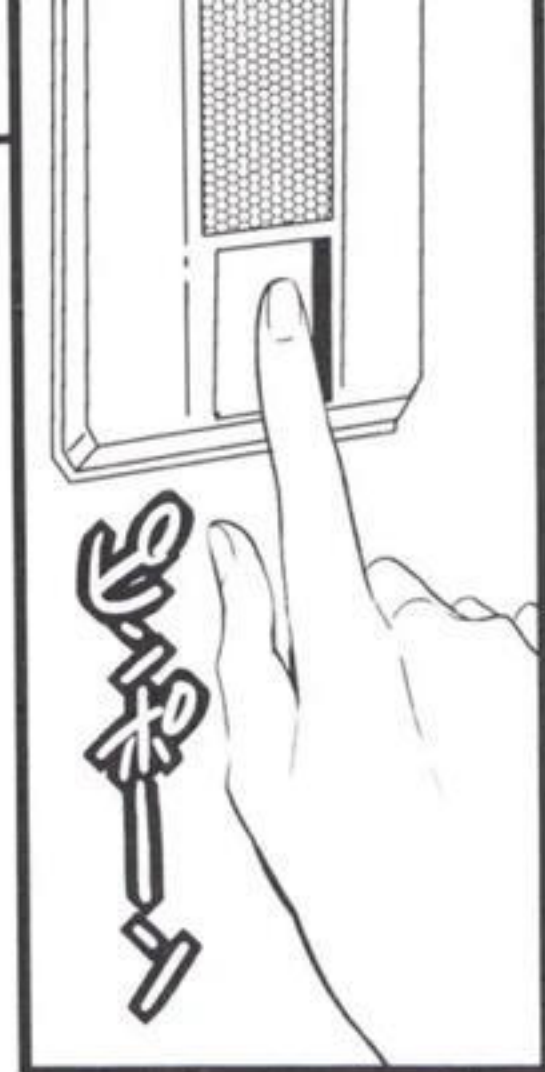
僕は…

シンジ君…



それに僕は
自分の気持ちを
伝えるって
ちゃんと
決めたんだから









カヲル君！

居たんだ…
よかった
何事もなく

こんな遅くに…

何しに來たの？

シンジ君…



なんでかな…

ご…ごめんね

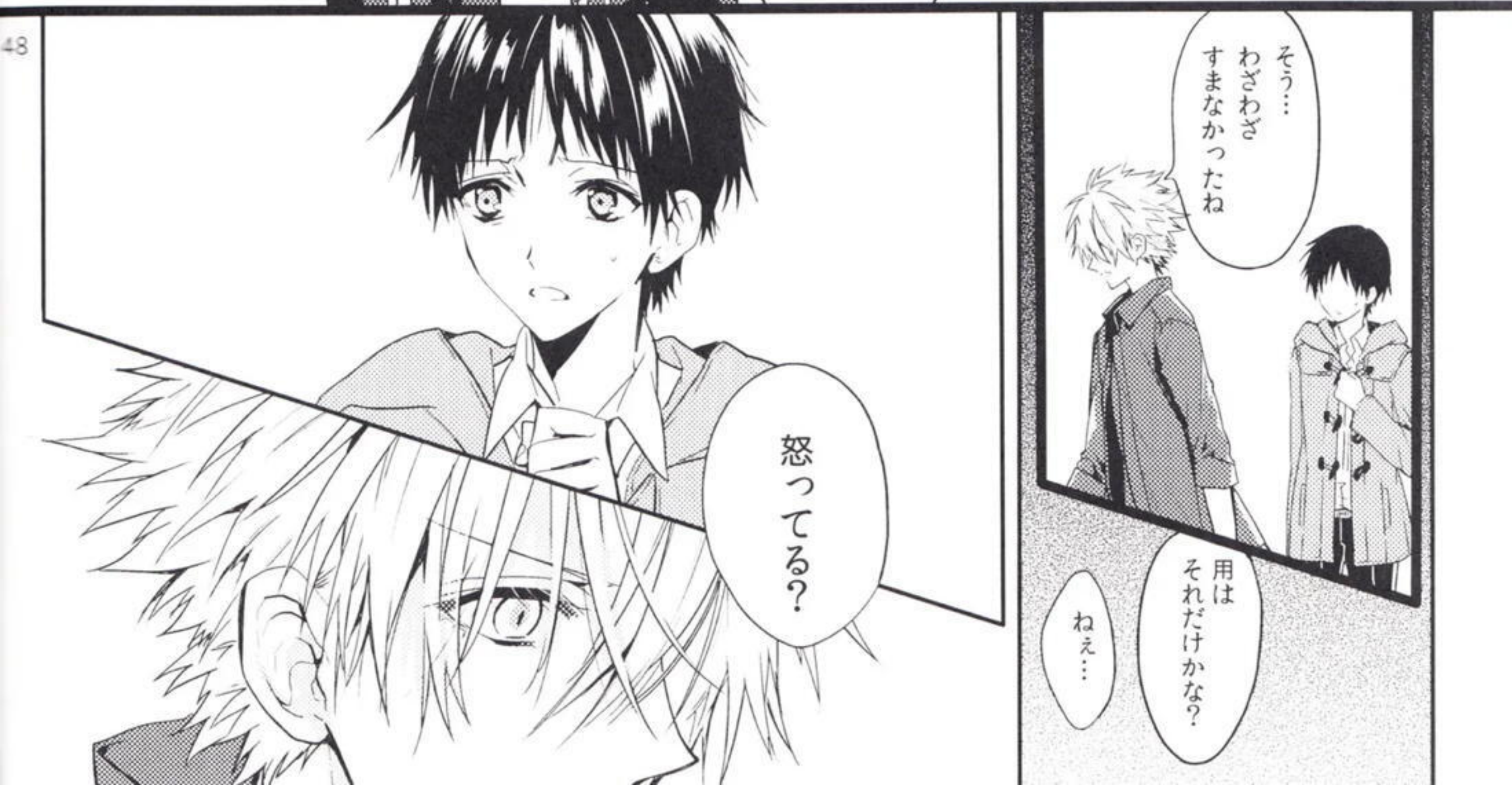
君にミサトさんから
届け物があつて…
それで
メールしたんだけど
返事も無いし

来てみたら
部屋の鍵は
開いてるのに
気配もなくて

君に何か
あつたん
じゃないかって

心配で…

カヲル君の
雰囲気が…
いつもと違うような



怒ってる？

そう…
わざわざ
すまなかったね

用は
それだけかな？

ねえ…

どうして
そう思うの？

だって…
いつもと
違うっていうか…

やっぱり人の家に
勝手に入っちゃ
まずかったのかなって

ふふ…
変なシンジ君

僕が君に
怒る？

そんなこと
あるわけない
じゃないか

だって
僕たちは
友達だろう？

おきん

友達…

カヲル君…！

僕ね、
君に
言いたいことが…！

君は

あまりにも
無防備すぎる

……？



怖い…

カタ

カタ

カタ

ねえ…離してよ

どうしたの？
やつぱり
怒ってるの？

怒ってないよ

嘘だ…
怒ってる
じゃないか

なら
どうして君は
震えているの？

え？

あの男には
触れさせておいて

どうして？

僕に触れられるのは

怖いの？

僕を
拒絶しないで！



ちよつと……!

やつ……!

52



変だよ……

さつきから……



ねえ
シンジ君……

君は
昔言ったよね



カヲル君!



やめ

やめてよ……!



あっ



んん……

「僕自身の幸せを
願って欲しい」
……って

覚えてる？

僕はそれまで
君のことしか
考えたことは
なかったし、

君の幸せばかり
考えてた、
君のためなら
死んでもいいとさえ
思っていた

僕の世界はいつも
君という存在で
始まり完結していた……

自分の人生の在り方や
自己のアイデンティティー
というものについて
考えたことさえ
なかった

オシ

だって
そうだろう

それがたとえ
自分の命だとしても……

僕は君の幸せ以上に
大切なことが
理解できなかったの
だから

わかるよね？

そんな僕を
自分のために
生きて欲しいって
言ってくれたのは
君だった



僕は
君が大切だからね

大事な大事な
たった一人の
僕の友達…



それはつまり
僕はシンジ君が
居なければ

幸せになれないって
ことなんだよ？



僕は君に
言ったよね
君の傍に居たいって

君は僕に
言ってくれたね
僕を一人には
しないって



君は？



でも…

ぼ……く？

シンジ君は
僕が傍に
居なくても…

幸せなんじゃ
ないのかい？

本当は君は
誰でも良かった
んじゃないの？

君の傍にいる友達が
たまたま僕だった
だけじゃないの？

心の穴を
埋めてくれる友達なら
誰だって…

本当に？

それに！

君は僕にとって
大事な友達で

いきなり何を
言い出すんだよ！

そんなこと
あるはず
無いだろう！

君にとって
友人なんて関係は

きゅん

いくらでも
この世界には
居るだろう

君は

君に対して
優しい人間なら
誰でもよかったんだ！

僕以外の…
誰かでも…





君は…
そんな風に
思ってたの？

わっ！

サッ

もういっよ……

カヲル君の
わからずや！

僕だって
ずっと
君だけだったのに…



僕だって



君のことが
一番…
好きなのに!



碓シンジ

さっきのメール
気づかなくてごめんね
ミサトさんからお土産を
頂いたので、
バイト上がったら
カヲル君のうちに持って
いかな?

何をやってるんだ
僕は



あんなの
ただの八つ当たりだ

勝手に嫉妬して

勝手に君の気持ちを
決め付けて…

「君は誰でも良かったんだ！」

あの言葉は
この世界でも
僕を必要としてくれた
シンジ君の心に対する
裏切りだ

もう二度と…
あんな顔させたく
なかったのに

リリンになっても
何も変わっちゃ
いないじゃないか…

いや…それ以上に…





最低だ

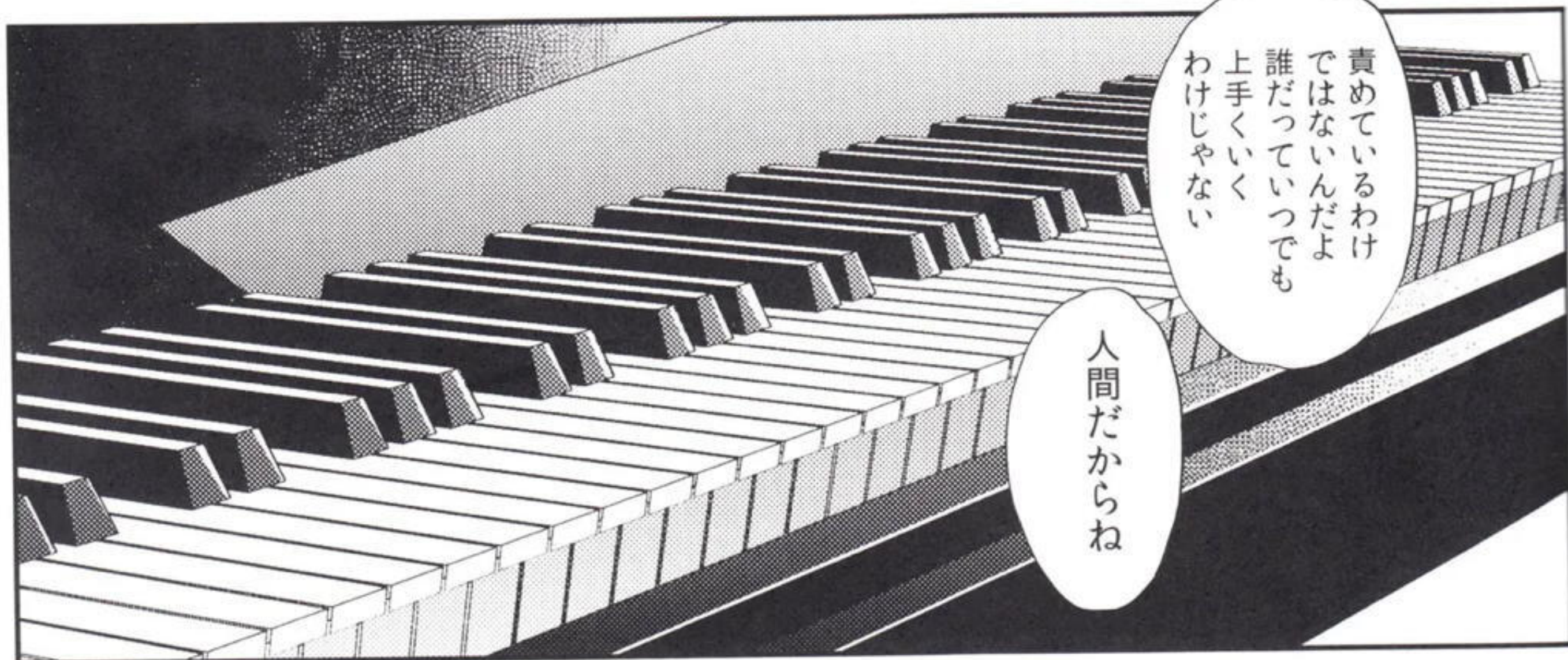
僕って...

傍に居たいと
願っても

結局は
君を不幸にしか
しないんだ

未来の扉

2013/03 Tetsu-Sabi
KAWORU × SHINJI
EVANGELION fan book



何度も言うが
君はもつと
いい音楽を
知るべきだ

世界を知るべきだ

それだけの教育は
日本では
限界があるからね

トップレベルの教育は
やはり本場の
ヨーロッパで
受けねば

ここでその才能を
燦らせておくのは
勿体無いんだよ

君には素質があるし
可能性があると
思っている

これは
お世辞なんか
じゃない

迷うのは結構だが

君は
何のために
ピアノを
弾いているんだ？

すまない
私も熱くなり
すぎたよ

結局のところ
決めるのは
君自身だ

何のため…

君が
僕の弾くピアノを
好きだと
言ってくれたから

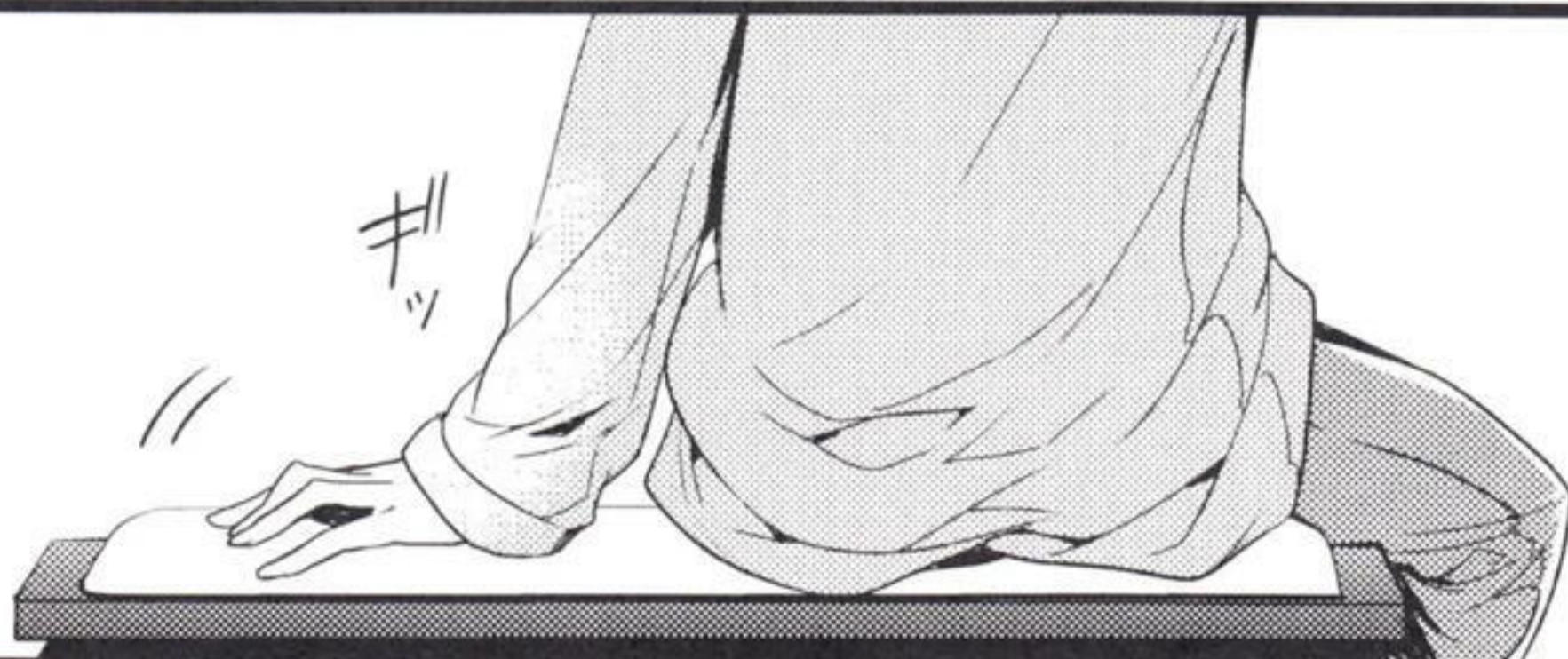
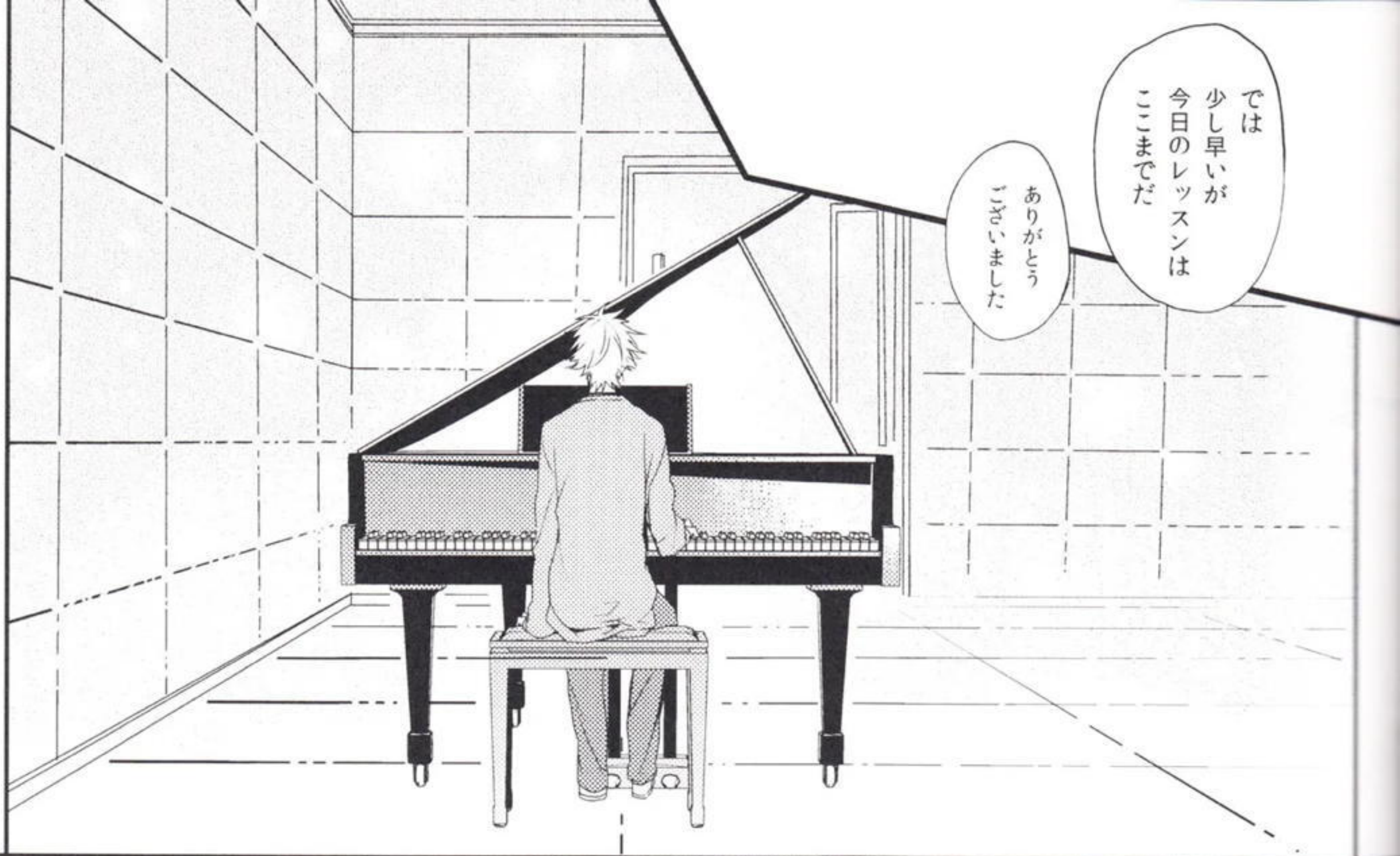
まだ少しだが
時間はある

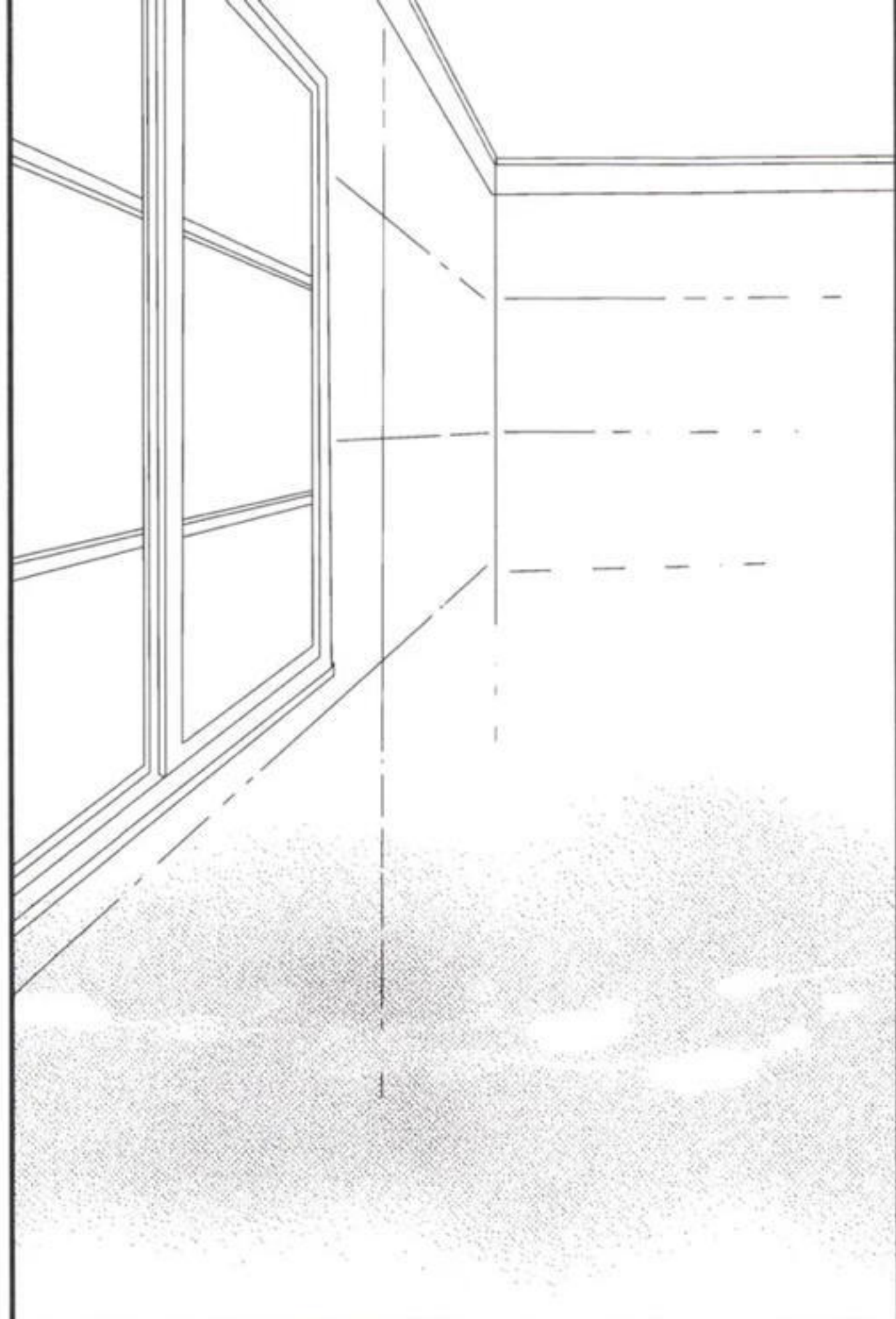
来週のレッスンのとき
最終的な答えを
聞こう

はい…

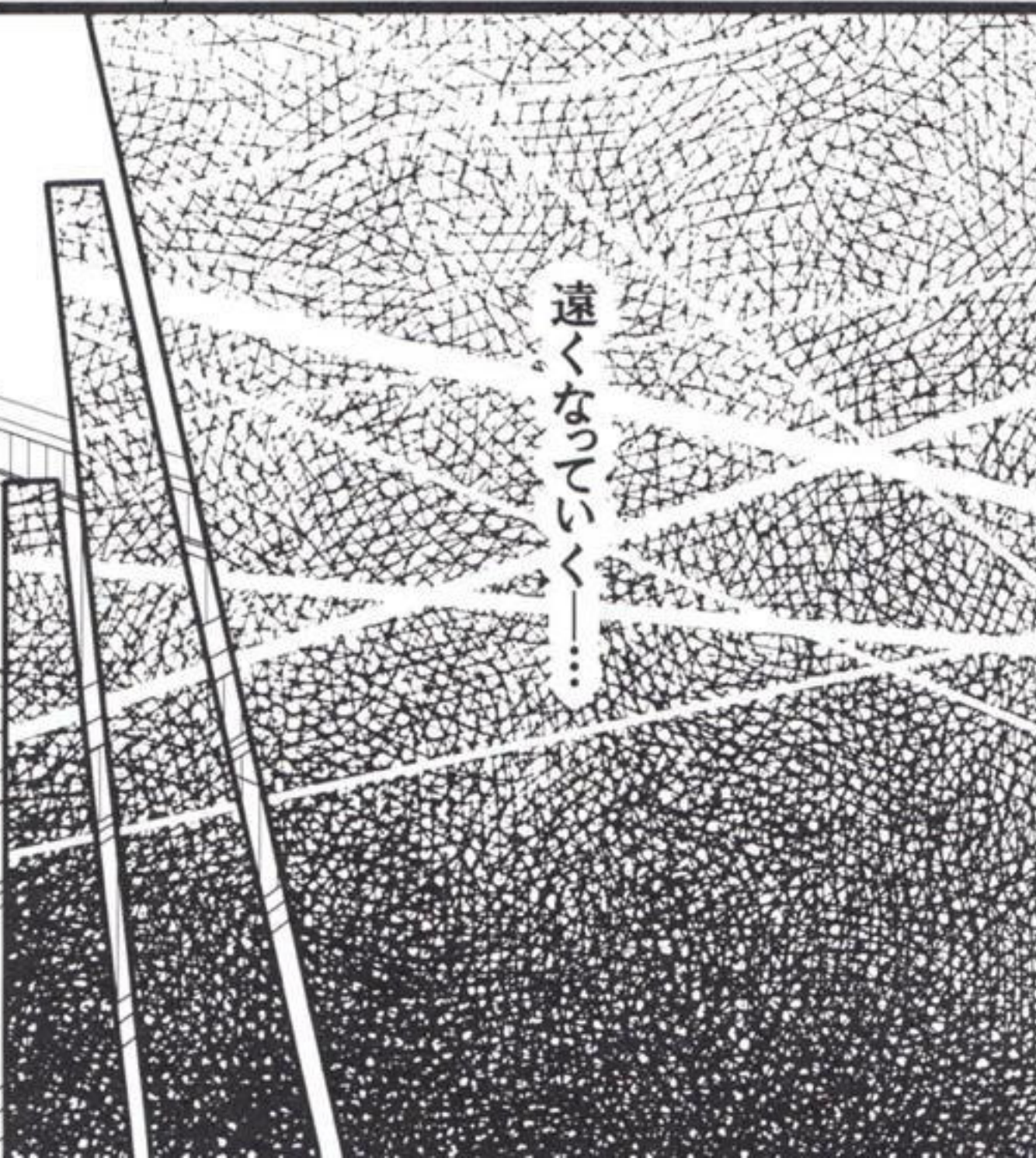
では
少し早い
今日のレッスンは
ここまでだ

ありがとう
ございました





君との距離が…





「会いたい」と

メールをしようと
するたび

あのときの
カヲル君の目が
忘れられなくて

拒絶されたら
どうしようと思ったら
怖くて…

ボタンが
押せない

こんなの
全然男らしくない

情けない

だけど
どんな顔して
彼に会ったら
いいのか

もう
分からないんだ

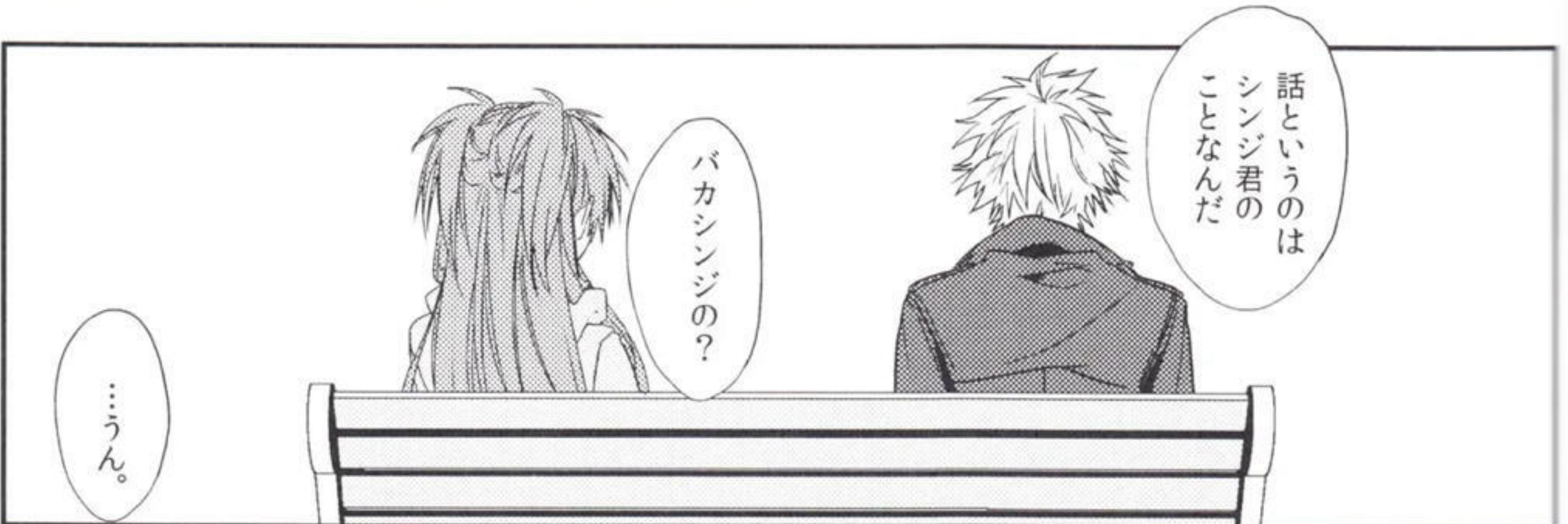
今日は
渚君来てないのね
金曜日なのに…

そう…だね…
体調悪いのかな

兄さんは
何も聞いてないの？









これからの
シンジ君の
幸せを

君に
託したいんだ

はあ？

僕には
シンジ君を
幸せにするには
役不足だと

不幸にしか
しないって
そう思ったんだ…



けど
君になら
それができる

君ならきつと
シンジ君の気持ちを
理解してあげられる

君はシンジ君の
大切な友達の
一人だから

でも僕は
彼を傷つけて
しまった

僕の身勝手な
気持ちを
押し付けて

彼の気持ちを
裏切ってしまった

こんな僕は
彼に相応しくない

僕が傍にいても
きつとまた
彼を苦しめる

彼には
君のような

彼の気持ちを
自然と汲み取って
あげられる人が
相応しいのさ

だから…ね



あんた
バカア？





アス……カ……

何があつたのかは
知らないけど……



他人の気持ちが
そう簡単に
分かるとても
思ってるの？

シンジの気持ちを
ちよつとでも
考えてみたの？
分かつたの？



シンジのためとか
言いながら

ほんとに
自分のこと
ばかり

傷つくなが怖い
臆病者のくせに



そんなの
願ひ下げよ

私の気持ちが
あのバカに
届かないからって
同情のつもり？

あんたに
同情されるくらいなら
死んだほうがマシよ

ほんつとに
揃いも揃って
つくづく
ウルトラバカね！

…っ！

バカって…！

僕だって
彼のために思って…！

彼のため
ですって？

押し付けがましい
善意なんて
迷惑なだけよ

私にも、
シンジにもね

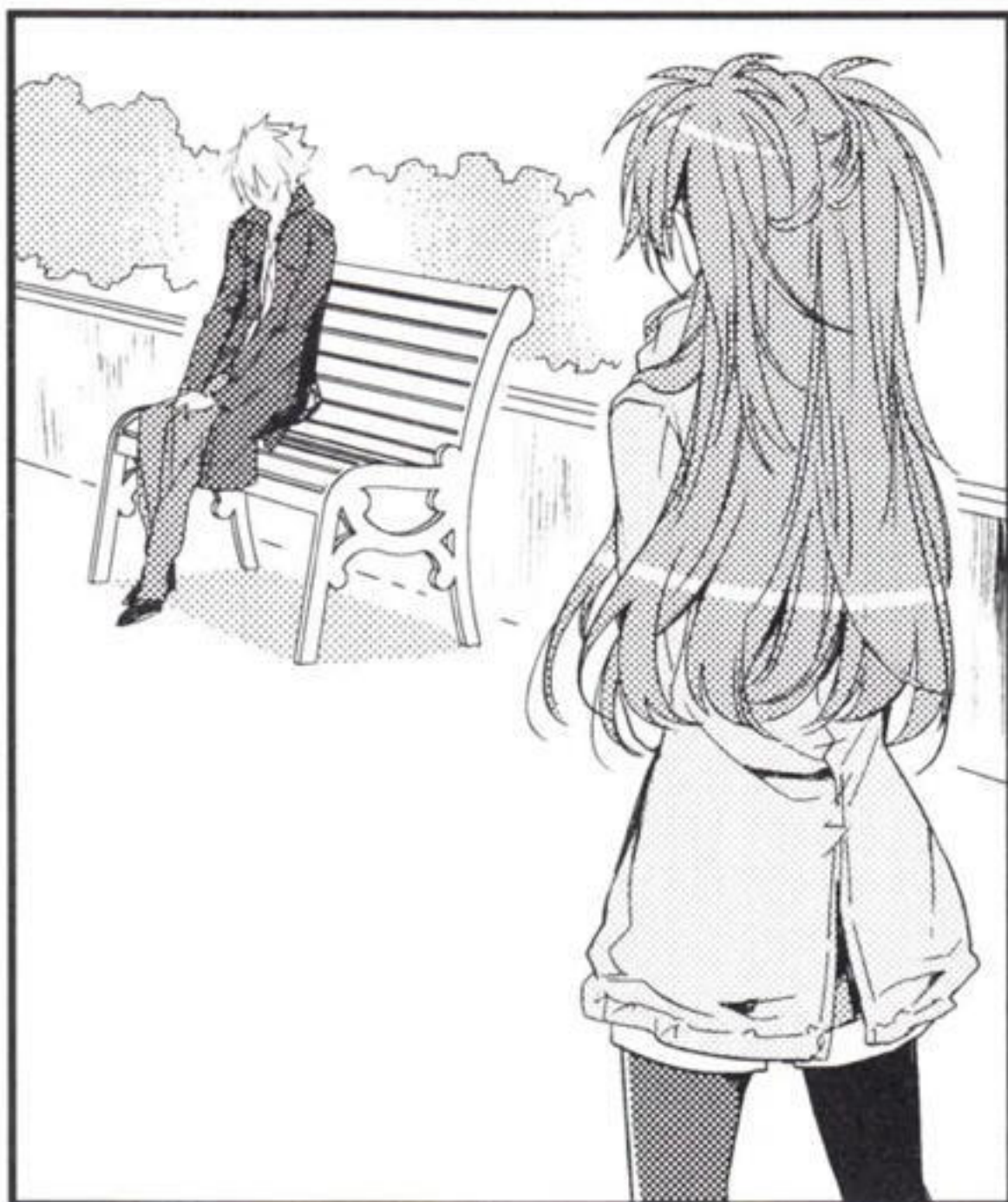
逃げちゃだめよ
シンジから

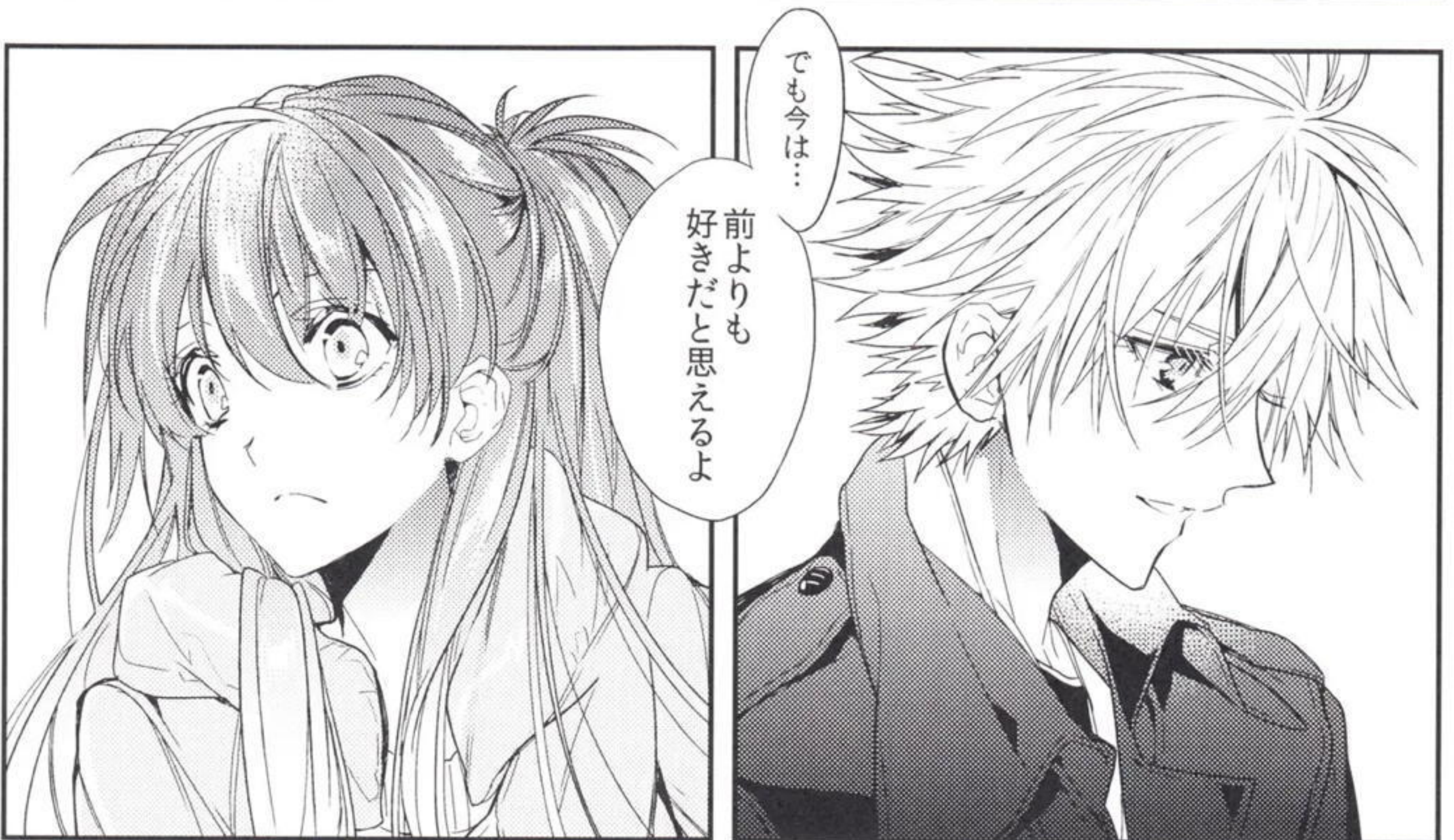
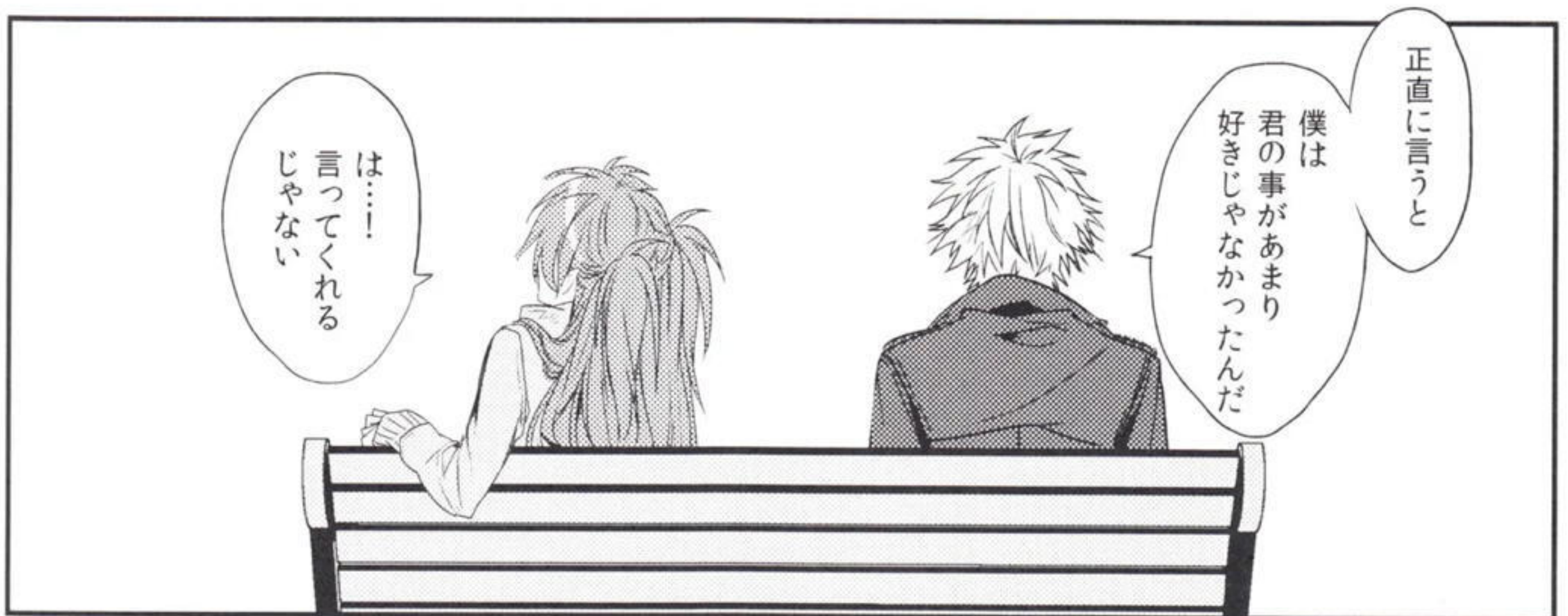
何よりも自分から



ちよつと
待ってなさい









私って…

ほんとにバカね…

はあ…





ひゅめっ!

ぎゃあああ



コネメガネ!
なんだあんたが
ここに居んのよ

その呼び方
やめてよ
マリって
呼んでよ姫♪

あんだこそ
姫って呼ぶな!

見てたよ
最初から最後まで!

っていうか
あんたひよつとして
さっきの見たの?



タチ悪いわね
覗き見なんて

ちよつとした
好奇心って
やつですよん

姫ってば
すつごく
男前だったよ



でも
どうせなら、

わんこ君も
イケメン君が
大好きなんだよって
言っちゃえば
よかったのに

だめよ
そんなの…

えっ
なんで？

私が伝えたって
意味ないし

これ以上はただの
おせっかい。

あいつの気持ちは

あいつが
伝えなきゃ…

そっか

ホカホカ
するにゃー

姫は
優しいね

やっ
優しくないわよ！

なんなのよもう
さっきから
どいつも
こいつも

そんな姫が
私は大好きってこと♪

……
はいはい



お体は
大丈夫なんですか？

大したことは無い
少し風邪気味
だったのを
こじらせてしまった
だけだ



ガラ

やあ、すまないね
どうやら妻が
少し大げさに電話して
しまったようだ



コン
コン

シンジです
失礼します



入院する必要も
なかったんだが、
年も年だし

検査入院も
兼ねる事に
なってね

お元気で
安心しました

私のことよりも

最近では
君の事のほうが
少し気掛かり
だったかな



人前では
なかなか
見せなかったが

たまに
寂しそうな顔を
していた

それは…



僕
どうしたらいいのか
分からないんです



そうか…
それは大変だ



大事な友達と

喧嘩を
してしまつて



どれ…
年寄りの長い話に
なるが

ちよつと
聞いてくれるかね？

今の君にとって
ヒントになれば
いいんだが

話…ですか？



君のお父さんと
お母さんの話だ

僕の？



君も知つての通り

君のご両親と私は
古くからの
付き合いでね

君が生まれる前の
ご両親については

きつと君以上に
知つていると思う

さて…
どこから話そうか

碇ゲンドウ
つまり君の父親は

私が知る限り
何も無い男だった

当時のアイツは
やれと言われたことに
大して、何の感慨もなく
ソツなくこなしていたが、
自分から行動を
起こすような事はしない

そうですか…
わかりました。

例えるなら
ロボットのような奴
だった

ユイ君と
出会うまではね

何にも無関心で
趣味の1つも
ありはしない
さびしい男

それが
あいつに対しての
私の第一印象

今日から新しく
ゼミ生が
加わることになった

君の1つしたの後輩だが
何せこのゼミは少人数だ
分からないことがあつたら
君が教えてやってくれ

ユイ君は
そんな何にも無関心な
碇とは正反対の
女性だった

いつも誰かの
心の支えに
なっているような
娘だった

時には自分の身も
かえりみないような
ちよっぴりヤンチャな
娘でもあつたかな

そんな彼女と碇が
出会ったのは大学3年
私がまだ大学で教授を
していて、
その私のゼミでのことだ

初めまして
綾波ユイです

初めまして

碇ゲンドウ…です

至らない点も
あるかと思いますが
よろしく願います
碇先輩

ああ…
こちらこそ

おそらく
一目ボレという
やつだろうな

彼女のために
何かしてやれることは
ないかと、
考えるようになった

荷物…
重たそうだな
半分持つよ

不器用ながら
他人のために、
自分の意思で
行動し始めた

ありがとう
碇君…!!

ユイ君と
出会ってから
碇は変わった

ある日
あいつに聞かれたよ
何か彼女が好きなものは
無いか教えてくれと

私は彼女が
幼い時からの知り合い
だったから、
そういうことも
多少は知っていた

ユイ君は昔から
本が好きなの
だったから

彼女が
好きそうな本を
沢山紹介した

その本を
碇は片っ端から
読み込んでいた

他人に好意を抱けば
その対象の思考を
理解したい、
もつと知りたいと
思うものだ

彼女の世界に
少しでも
近づきたいと
必死だったんだろうな

さびしい人と

優しい人

碇の世界は
彼女によって
変わり

日々広がっていく

碇君とお話
していると
楽しい

時間があつという間に
過ぎていくのよ
不思議ね

それから数年後、
二人は同じ会社に
就職し、

私は教授職を辞め、
長年の夢だった
喫茶店のオーナーに
なった

最初のお客さんには
旧友である二人を
招待した

素敵な
お店ですね

わあ！

あら？

立派な
ピアノまで

冬月先生
お弾きになられ
ましたっけ？

いや、これは私の
子供が弾いていた
ものだが、
もう誰も弾かなくなっ
てしまったし、
店に置くことにしたんだ

さあ
席はどこに
座って貰っても
構わない
今日は君たちだけの
貸切だ

あの……！
ユイ……さん

今日は……
大事な話があつて

君に
聞いて
もらいたいんだ









友達よりも

ずっと
近くに居て
支えてあげたい…

そんな人です

ならば
そう簡単に
手放しては
いけないよ

そんな人間は
一生のあいだに
早々出会える
ものじゃない



でも…僕は

その人の
考えてることや
僕自身の気持ち
がよく分からなく
なっちゃって

どんな顔して
会えばいいのか

わからないんです



ならば
会って話せばいい



伝えなければ
分からない事だつて
あるように、

相手の気持ちだつて
伝えて貰わなければ
わからない事だつて
ある

カヲル君の…
気持ち

他人の気持ちを
推し量ったところで、

それが本当の
気持ちとは
限らない

そうだ…
僕はまだ大事なことを
伝えていない



僕は…
彼と話したい

話してみます

それでは
僕はこれで

年寄りの長話に
付き合わせてしまつて
悪かった

気持ちは
少しは楽に
なつたかね?

はい…
とても

ああ
待ちたまえ

もう1つだけ
君に言っておきたい
事があつてな

いつ言うべきか
迷っていたんだが…

?

あの喫茶店
ゆくゆくは君に
託したいと
思っているんだ

え!?
そんな...!
なんで僕に

君の淹れた
コーヒーは
とても美味しいと
評判だ

今では
お客さんの
ほとんどが
それを目当てで
来店しているんだよ

でも...!
あそこは冬月さんの
大事なお店じゃ

もちろん
それだけじゃ
ないさ

君なら
あの喫茶店を
託した後

大事な思い出や
大事なつながりを
ずっと大切にしていけるだろうって

そう思ったからだ

まだ年若い君には
少しこの話は
重すぎたかもしれない

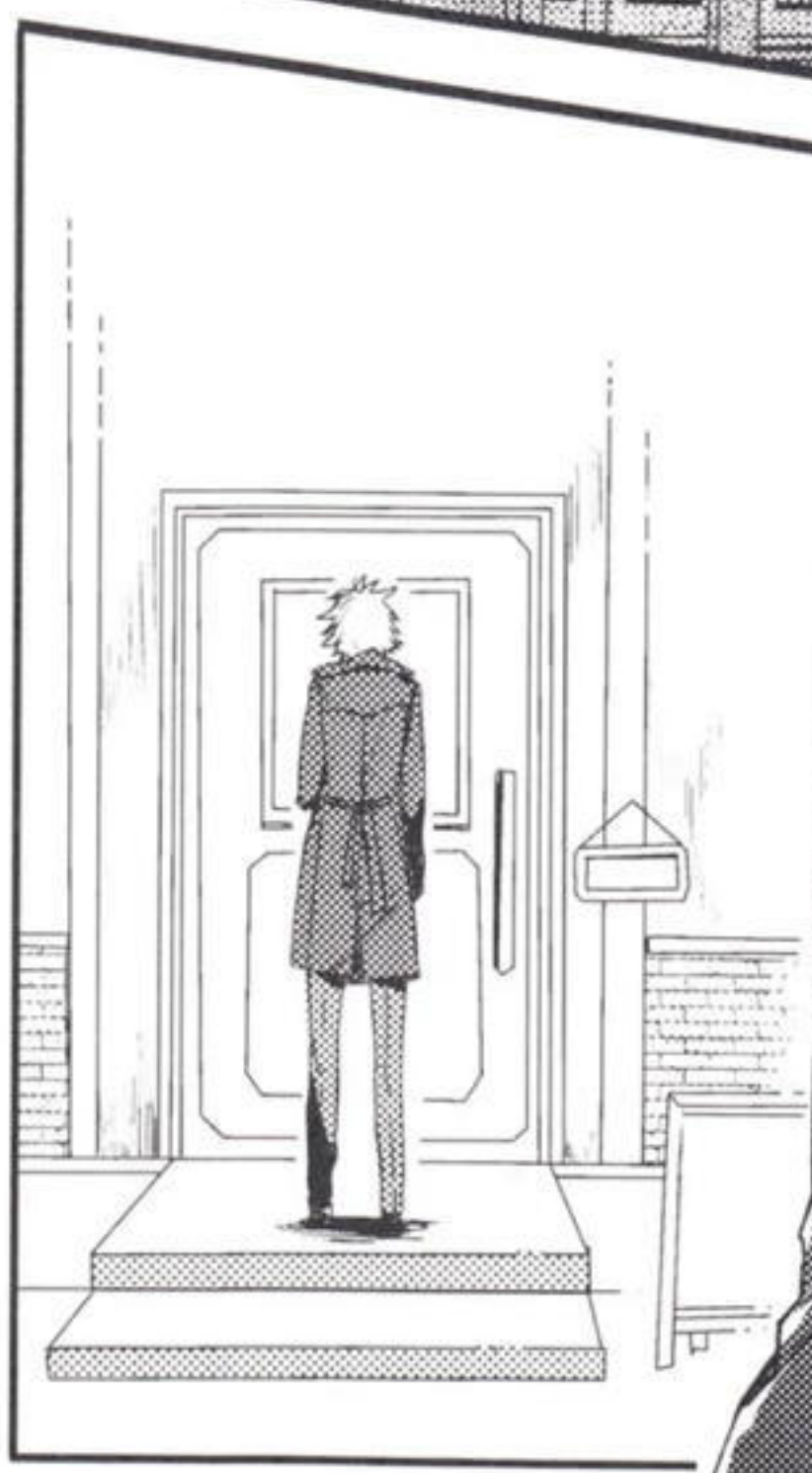
だが...
考えておいて
くれると
ありがたい

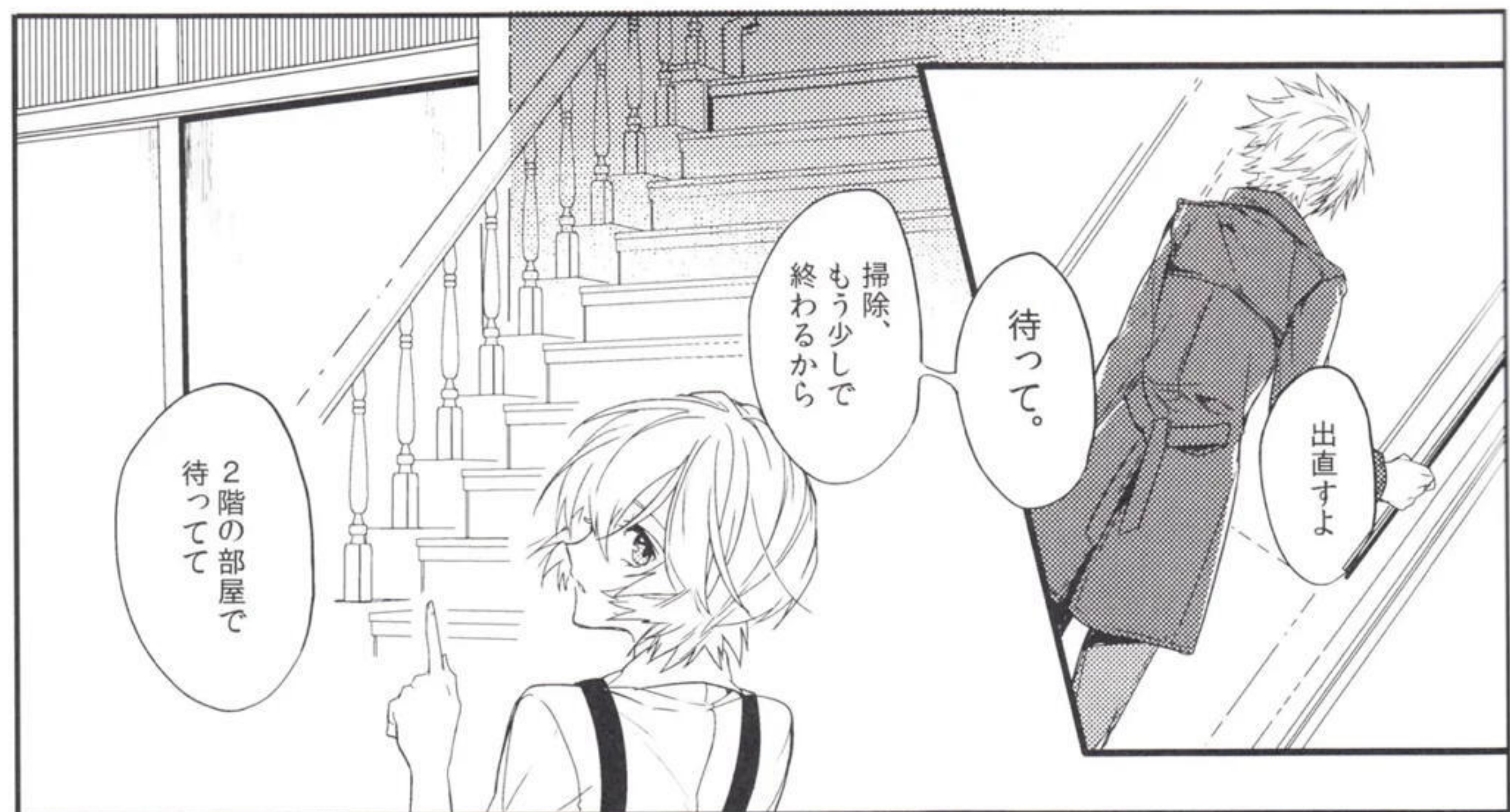
ありがとうございます
ございます

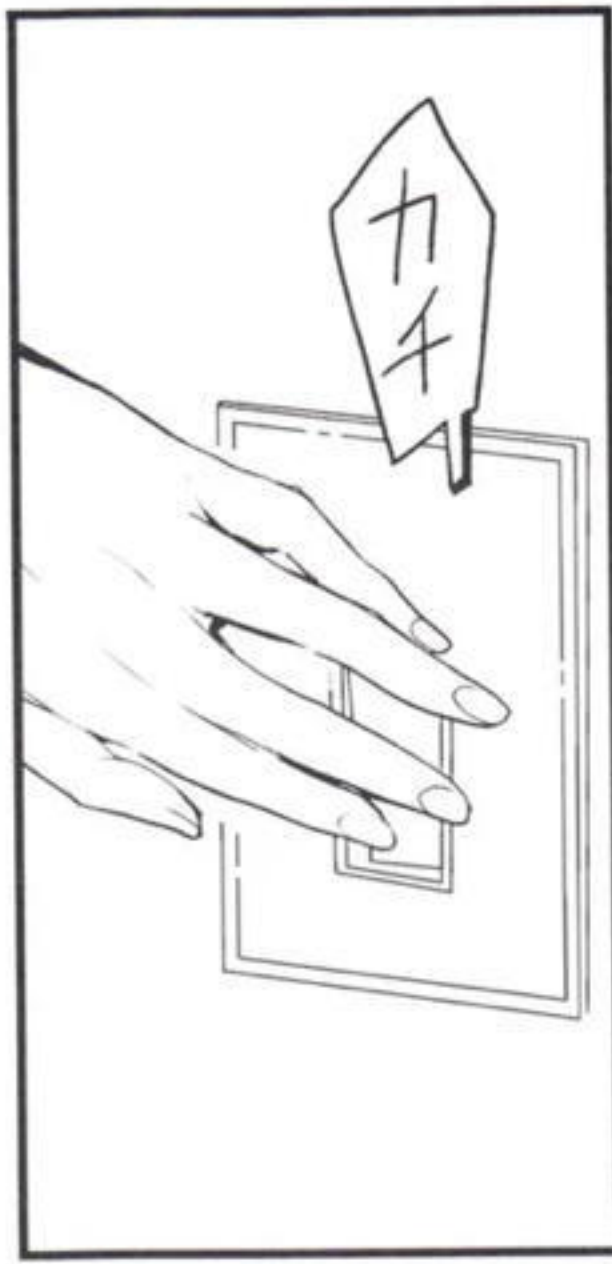
碇…

ユイ君

君たちの子供は
いい子に育ったな









渚君



最近
兄さんの元気が
無いの

—…そう

あなたと
何かあったとしか
思えない



シンジ君のと
似てる…



兄さんのほうが
美味しいわ



兄さんから
逃げないであげて



さつき
アスカにも
同じ事を言われたよ





兄さんは
皆に優しい

でも、
一番心を
許しているのは
他の誰でもない
あなたよ

だから

どうか
兄さんを

碇君を
信じてあげて



綾波…

レイ？





私は



碇君の幸せを願ってる

私の幸せはこの世界で叶ったの

でもそれだけじゃない
私自身の願いも

碇君がもうエヴァに乗らなくてもいい
選択肢の無い世界で
苦しまなくていい

そして、
彼自身の願いが
遂げられた



知らなかった…
君も別の世界の
記憶を持っていたんだ

最初からでは
ないわ



私は碇君の傍なら
どんな場所だって
構わないの

恋人同士
じゃなくても
母親じゃなくても
兄妹でも

碇君の願いが
叶うなら、
碇君の笑顔が
見れるなら

それが
うれしいと思う
私の気持ちだから



今、彼は
逃げずに
僕と向き合おうと
してくれている

だったら

僕も
その気持ちに
応えなくては

コーピー
ご馳走様

ああ…

メール…
碇君から？

行っ
て来
るよ

リ
リ
ス

い
い
え…

私
は
レ
イ

碇
レ
イ

あ
り
が
と
う…
レ
イ



君への

僕の



今すぐに

シンジ君に
伝えなきゃ



本当の気持ちを



もう迷ったり
逃げたりしない



僕は
ずっと君を待っていた



今は
君が僕を
待ってくれている



だから
早く
伝えなきゃ



カヲル君……！

シンジ君……っ

僕っ……！



僕が…
怖くないの？

もう
怖くないよ

本当に？

うん。

心臓…
すごく早い

走ってきて
くれたんだ…

一分一秒でも
早く

君に

会いたくて





シンジ君
まずは
謝らせて

ごめんなさい



君を
怖がらせて

僕の身勝手な
気持ちを
君に押し付けて

僕はまた
君を泣かせて
しまった

僕も
ごめんなさい

カヲル君を
信じて
あげられなくて、
君の気持ちを
分かってあげられなくて、

君を一人にして
逃げてしまった



ちがう…
それは僕だって

僕も君から
逃げていた

ずっと
一緒に居るって
言っただのに

ずっと
傍にいたいって
願っただのに

ごめん

ごめんね…

僕の願いや
行動は

いつも君を
傷つける

本当の意味で
君を救ったことは
無かった

それでも…!

どうか
君の傍に…

この世界で
僕が見つけた
たったひとつの願い事

君が気付かせてくれた…



一緒にピアノを弾かなくなっても

進む道はちがっても

君の心の近くに
在りたいと……

君にとっての
一番が
僕じゃなくても

君とずっと
一緒に居たいんだ



簡単な
ことだったんだ

ありがとう……

カヲル君

もっと
ちゃんと

自分の心を

それから……

君に伝えたい
一番大事な
ことがあるんだ

伝えれば
よかったんだ

僕も
君と同じ

君の傍に
居たい



カヲル君

好きだよ



僕はずっと
君のことが
好きだった

友達以上に
なりたかった

けれど
一歩踏み出すことが
こわくて
ずっと、
伝えられなかった

でも
やっと言える

心から
君が好きだ



大切な人……

友達は
僕と関わった人
すべてで

一人ひとりに
変わりなんて
居なくて

皆大切だけど



それでも
この世界に

愛しい人は
君しか居ないから



誰でもいいとか
変わりは居るなんて
ことは絶対に無いよ

僕は君じゃないと
ダメなんだ

君と
幸せに
なりたいんだ

ごめんね…
僕は

シンジ君…

何も
分かってなかった

そんな顔しないで

君には
笑っていて
欲しいんだ

自分の気持ちと
向き合うのが
こんなにこわい
なんて
知らなかった

自分の本当の
気持ちを伝えるのが
こんなに難しいこと
だったなんて
知らなかった

それから
すごく
こわかった

拒絶されるのが
こわくて
どうしようもなく
君を
キズつけて

僕は今まで…

こんなに苦しいなら
いつそ楽になって
しまおうと

逃げ出して
しまいたくも
なかったよ

僕は
生きるって事が
こんなに
難しいことを

はじめて知った

かつての僕は
生と死は等価値だ
と
思っていた

それは
イコール
なんかじゃない

死が与える
解放

生きることの
苦しさ
さびしさ
こわさ
嬉しさ
悲しみ

けれど
そうでは無かった

君と
生きること以上に
価値のあるものは

きっと

どこにもない

生きることの
難しさも

嬉しさも

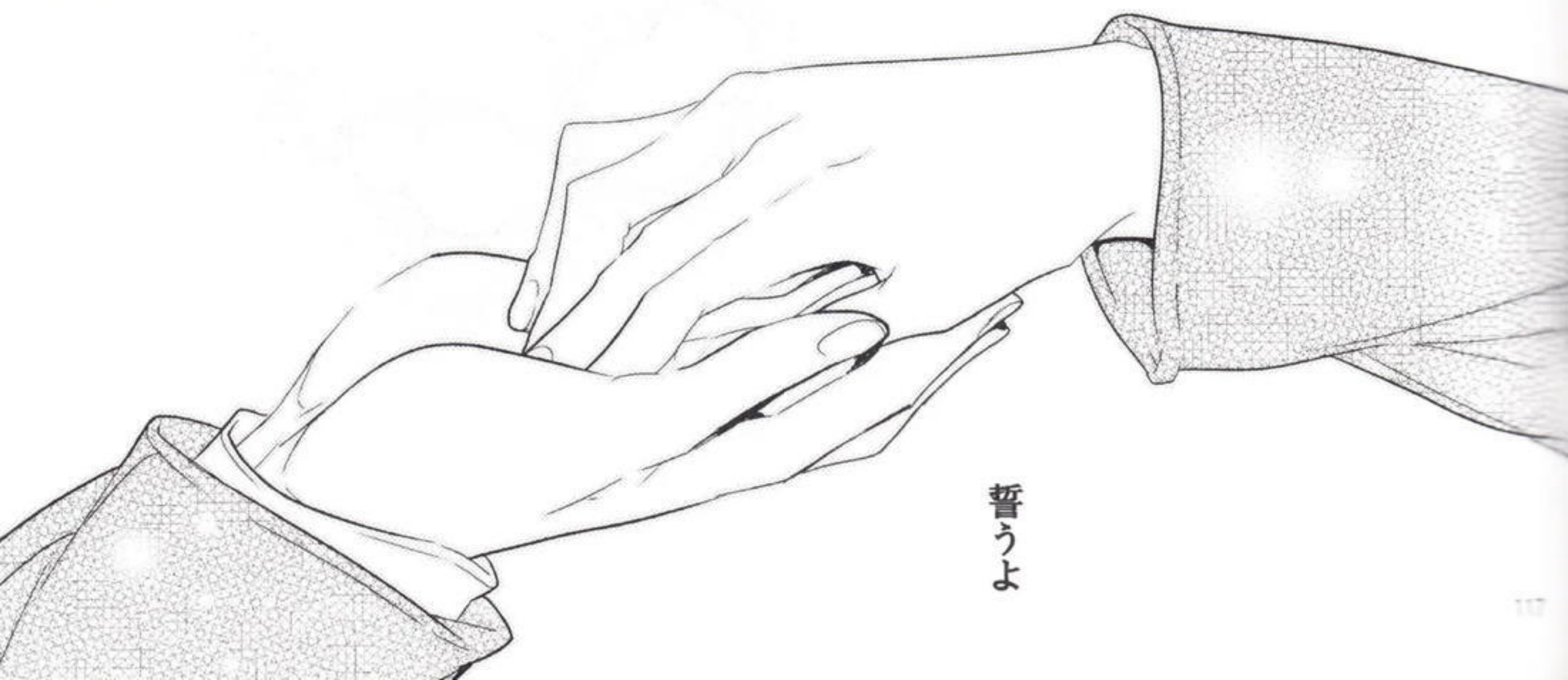
教えてくれたのは
君だから

僕も
君に伝えたい



大好き

僕も
君のことが



誓うよ



一生をかけて

君を愛すと



君の人生を
僕にください

絶対に
幸せにするから



うん

一緒に
幸せになろう



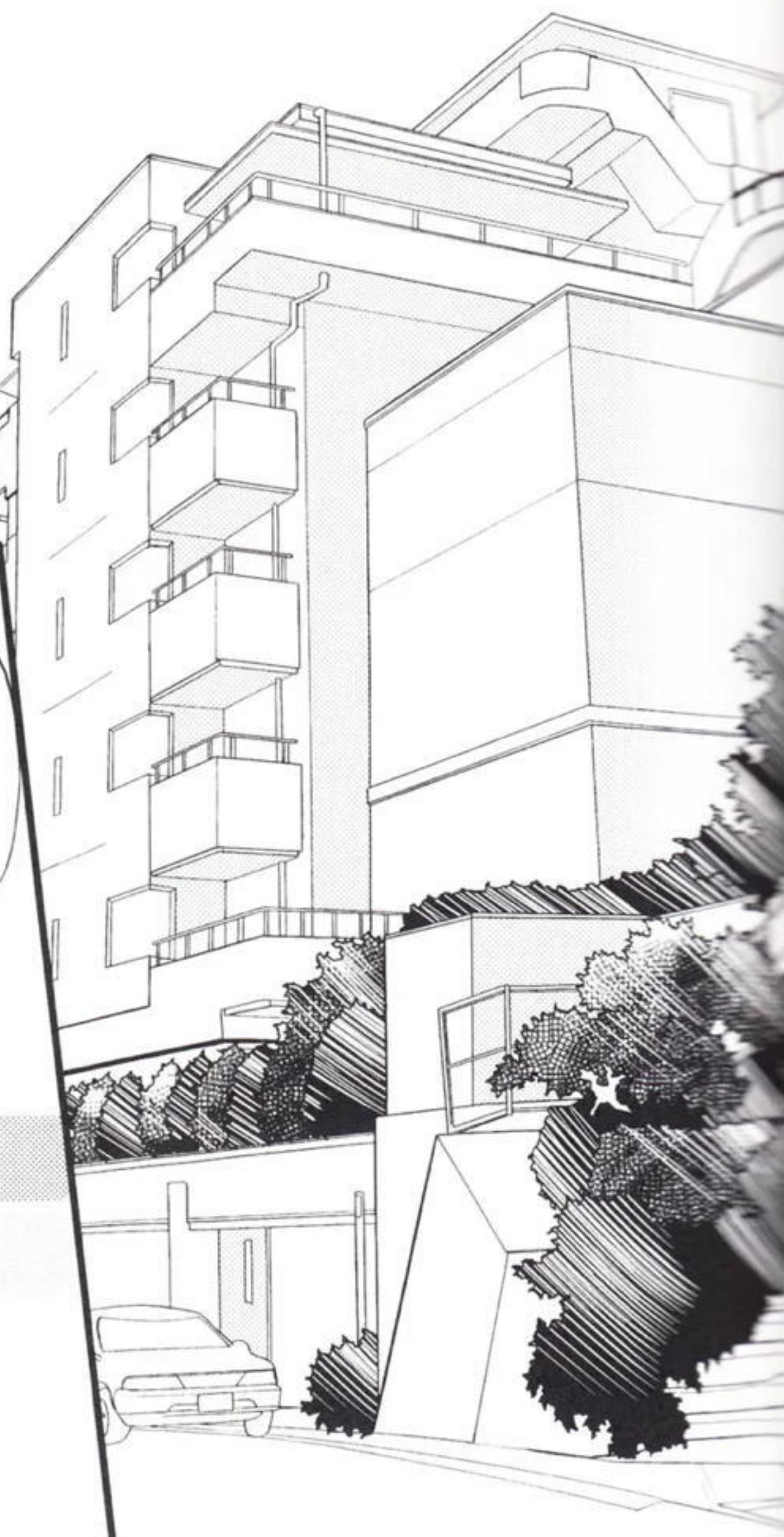
こうしていると
シンジ君と見た
流星群の夜のことを
思い出すね

もう7年前か…
早いね
時が過ぎるのは

君と過ごす時間は
とりわけ早く感じるよ
とても
楽しいから

そうだね









少し疲れてる
だらうから
ラテにして
砂糖も入れた方が
いいかな？

お願いするよ



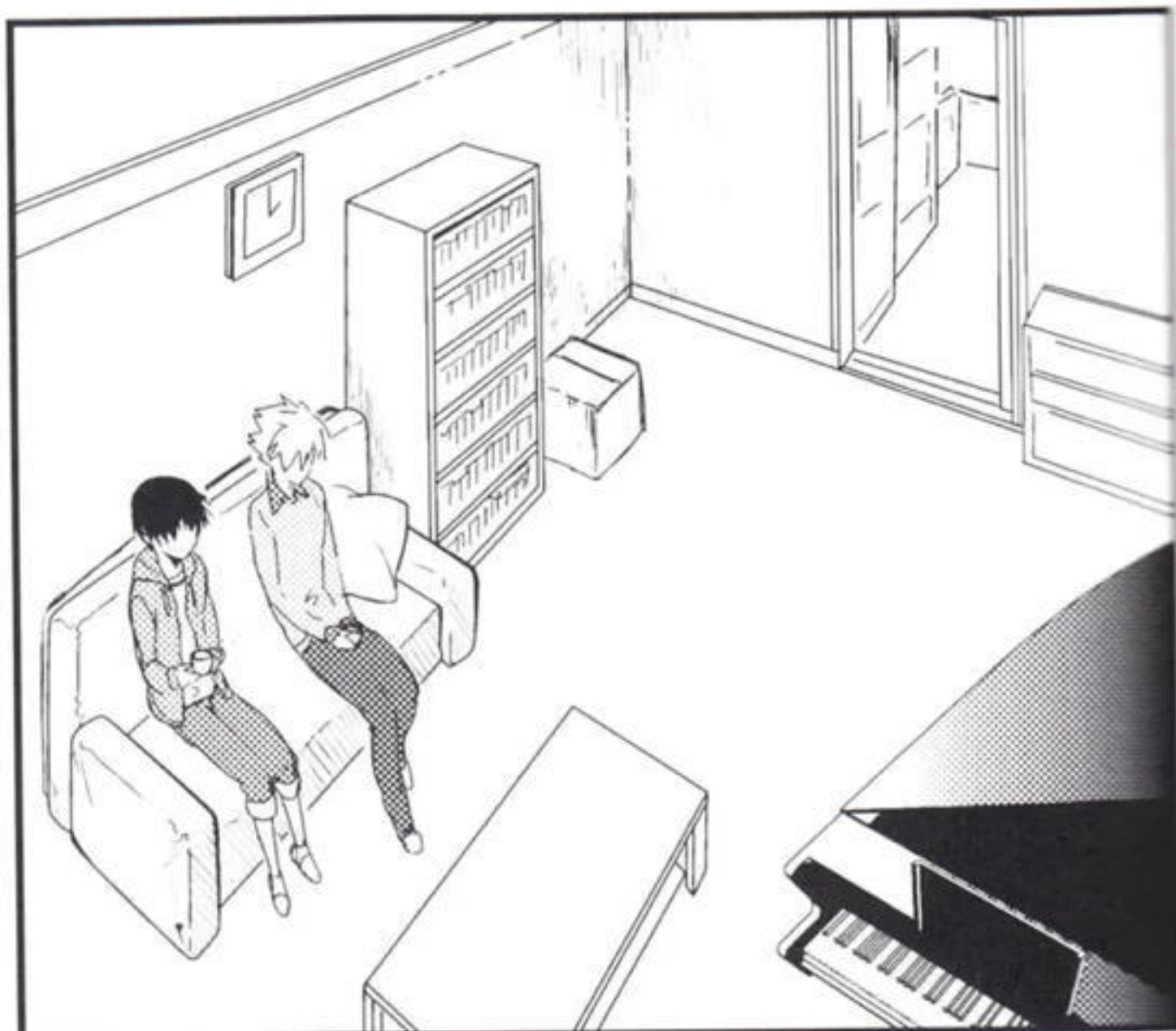
青が僕ので
オレンジが
カヲル君だっけ？

そうだよ



ごめんね

僕の我侭に
付き合わせ
ちゃって



ウィーンに
1年間
留学でしょ？

うん。



君と少しでも長く
一緒に居たくて

来月からは
居ないのに

どんなに遠くても
君は
必ずここに
帰ってきて
くれるんでしょう？

当たり前じゃないか

それなら
僕はいつまでも
待っている

そりゃあ
さびしくない
わけじゃないけど

この世界に
カヲル君が
居るなら

さびしさで
泣いたりなんか
しない

だから
君はしっかり
やるべきことを
やってほしい

ちょっと
カヲル君!?
どうしたの？

なんか君
最近
涙もろくなっただね
テレビ見て
よく泣いてるし

これは
嬉し涙だから

僕は
嬉しいんだ

シンジ君が
居たから
自分の存在理由を
見つけることが
出来た

シンジ君が
居たから

好きなもの
好きな人
愛する人

いろんなものが
自分の世界に
増えた

やりたいことも
見つけた

僕の世界の
全ての切欠は
君なんだよ

それでも
どうか忘れないで

僕の世界の中心は
君だってこと





幸せにしてくれて



ありがとう





いいんだ

もう



長い時間が
かかってしまった

僕はきつと
大丈夫だから…



たくさん
遠回りもした

たくさん
君を苦しめた

結局僕が
やってきたことは

君のためには
ならなかった

ごめん…



強くなったね…
シンジ君



ちがうよ

自分の願いは
自分で叶えなきゃ
いけなかったんだ

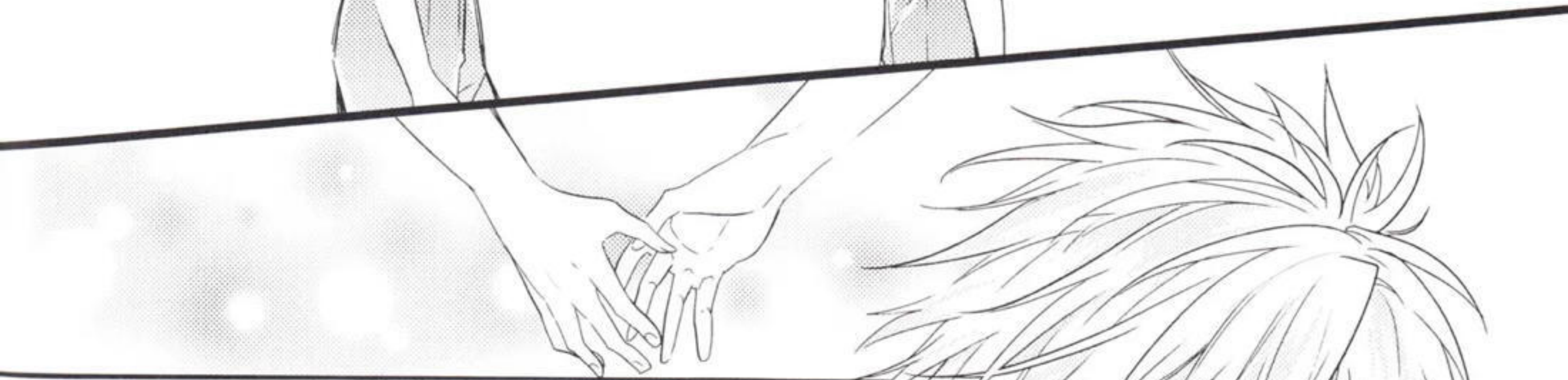
僕はそれに
気づくのが
遅すぎただけ
君のせいじゃない

強くなんかないよ

君が居なかったら
僕はとつくの昔に
諦めていた

だから

ありがとう
カヲル君



この手は…
温かい

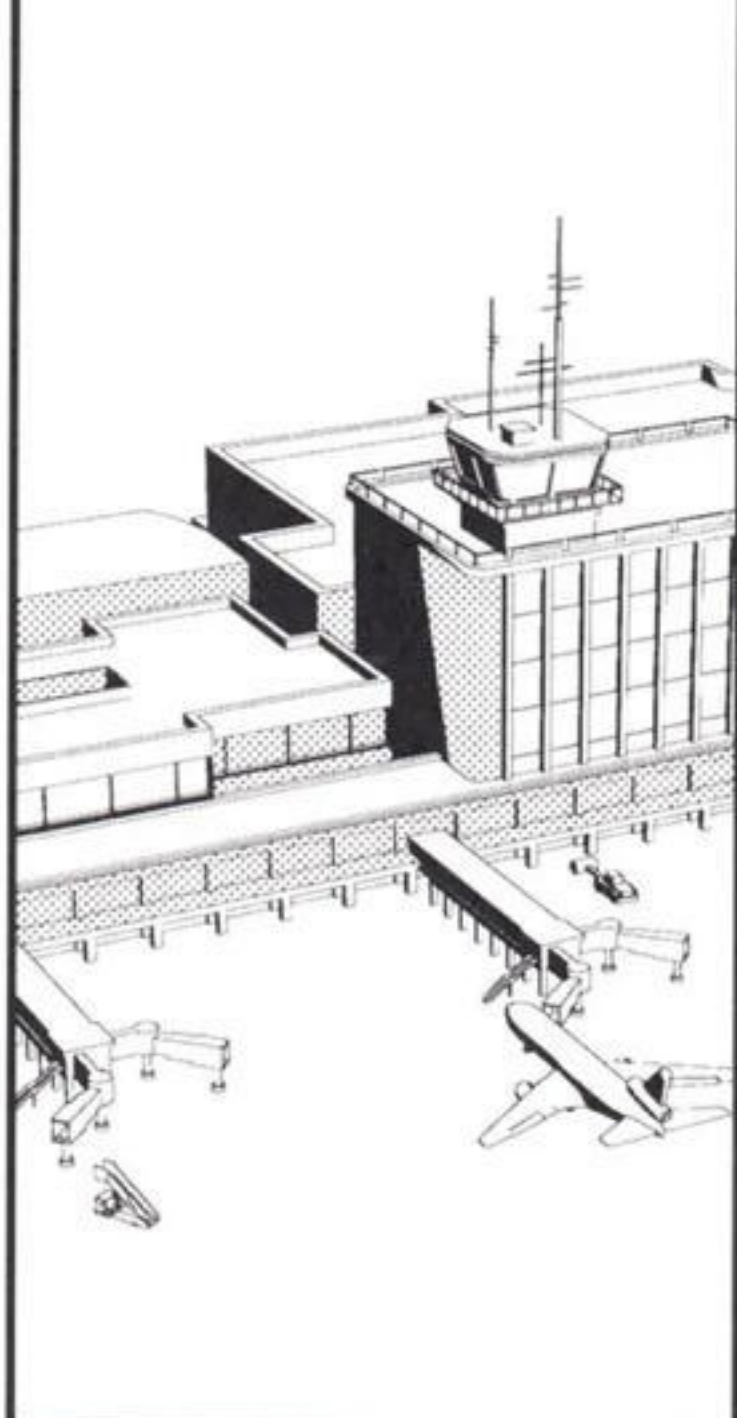
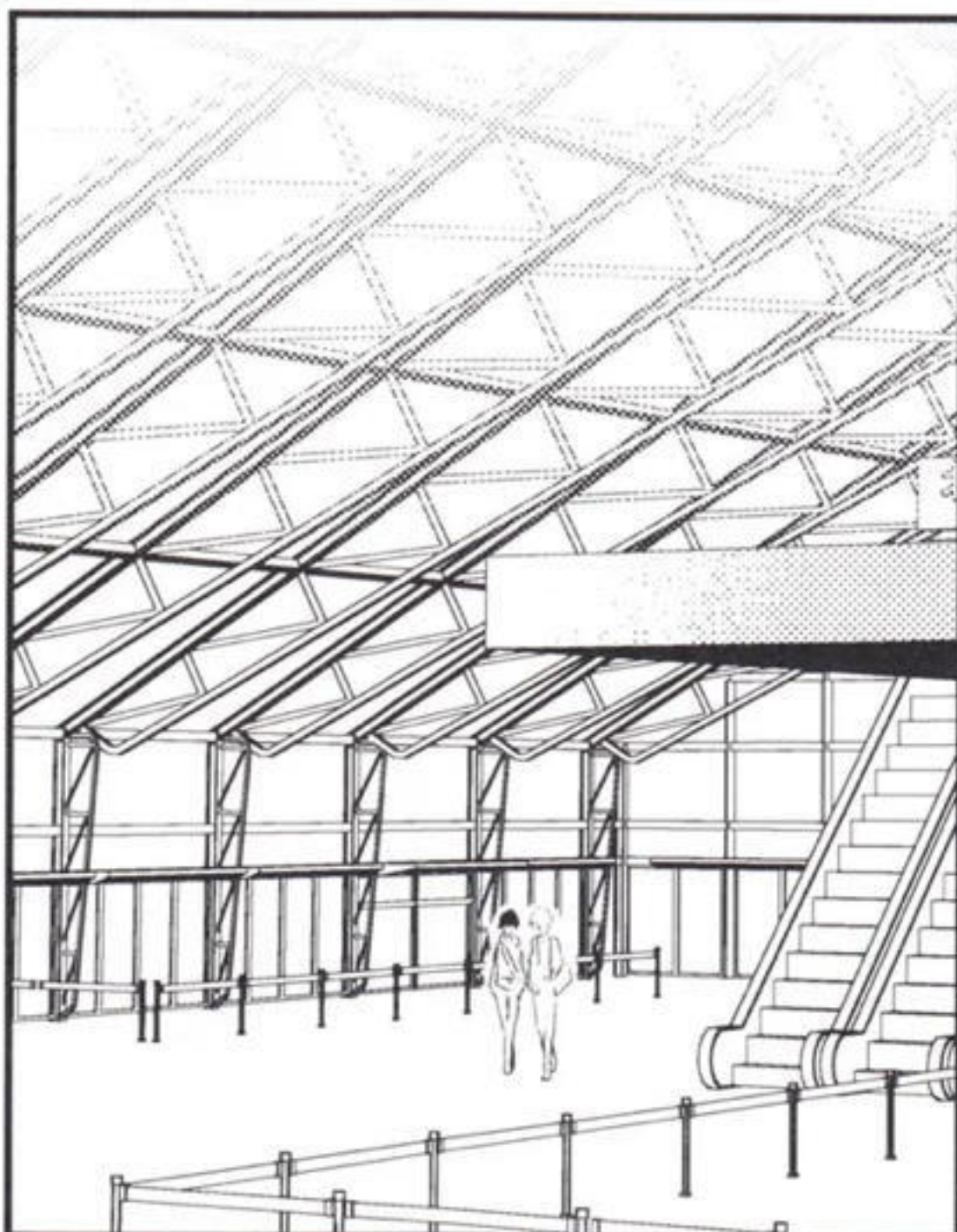
ありがとう
シンジ君





これから

ずっと一緒だよ







そういう
問題じゃないよ



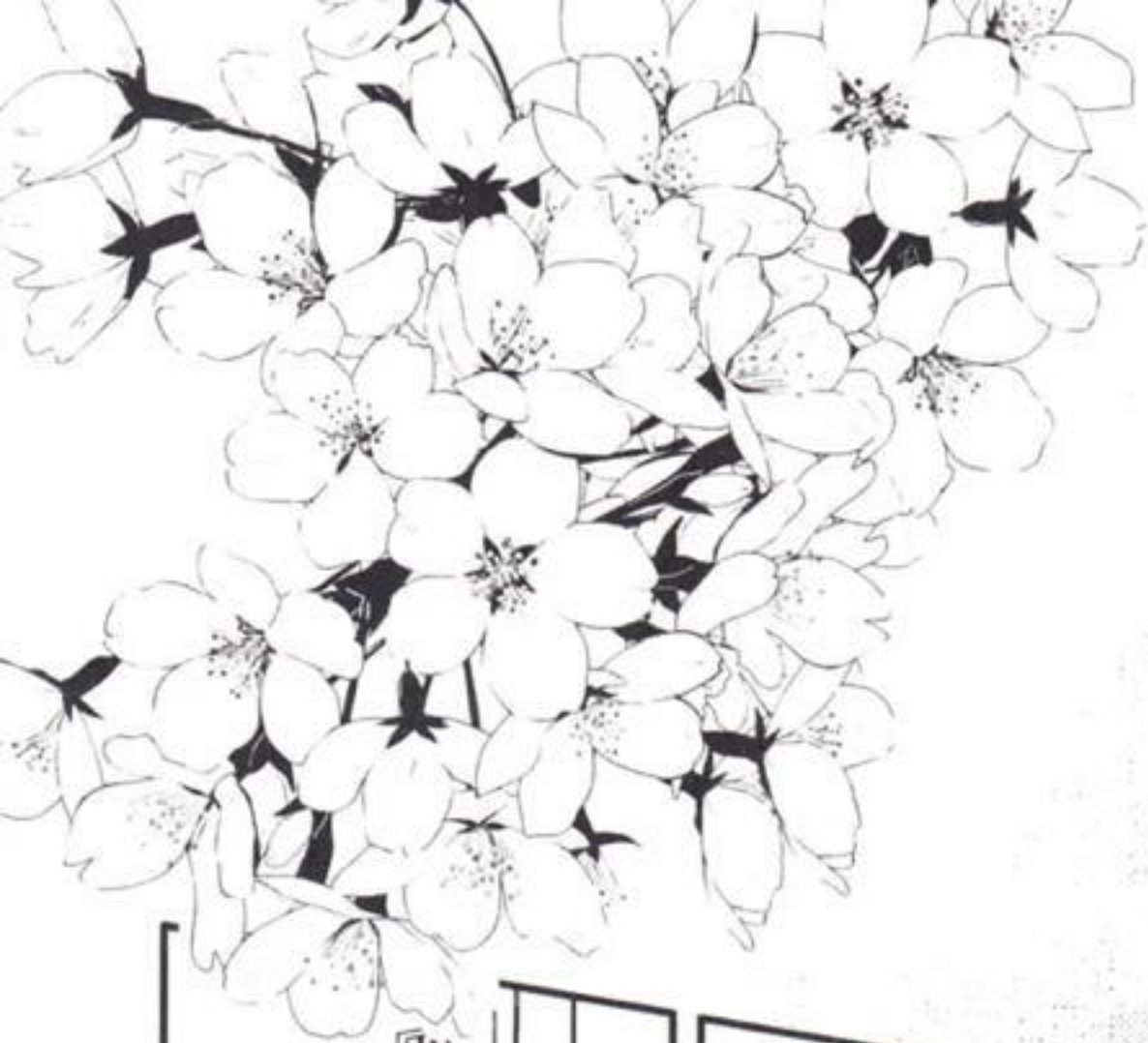
それじゃあ

いってきます

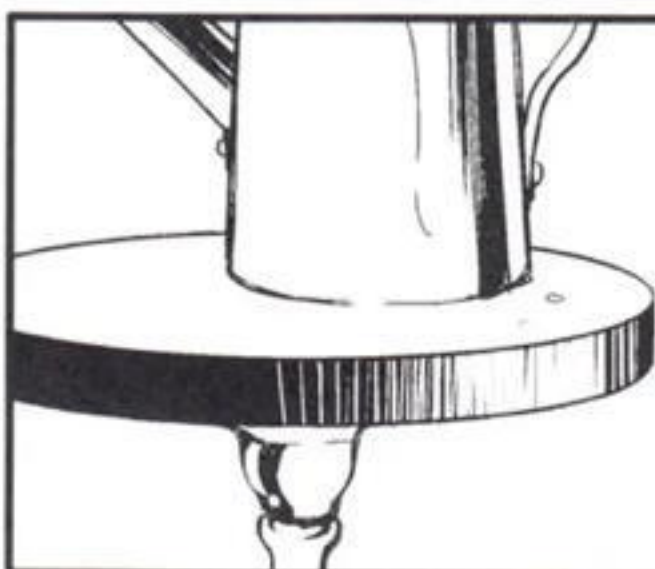


さよなら





One year after...



おかえりなさい！





END

あとがき

はじめましての方も、そうでない方も、
こんにちは文月路亜です。

今回は前作の7年後のお話を描きました。
前回、親友として終わった二人が、くつつくまでのお話です。
二人が幸せになれたらいいなと思って、描き始めましたが、
こんなに長い漫画はいまだかつて描いたことがないので、
かなり大変でしたが、
書き上げることができて良かったです。

お話の意味とか、いろいろ説明しようかと思ったのですが、
蛇足かなと思ったので、ちょっとだけ。

最後、昔の姿のシンジは、前作で
シンジの心のどこかにいて、カヲルを幸せにしてと
願っていた子です。

結局、シンジは過去の世界の記憶は戻りません。

覚えているのは、レイとカヲルのみです。

その二人の過去の記憶も、

人間として過ごしていくうちに、夢の出来事のように
薄れていくような感じかなと。

カヲル君は使徒としての、過去に捉われる必要がない世界なので、
この話に限っては、そういう終わり方がいいなと、
個人的に思っています。

あとは、シンジとカヲルが読んでた本は、破の劇中にチラっと
でてた本です。

ユイとゲンドウの話は、

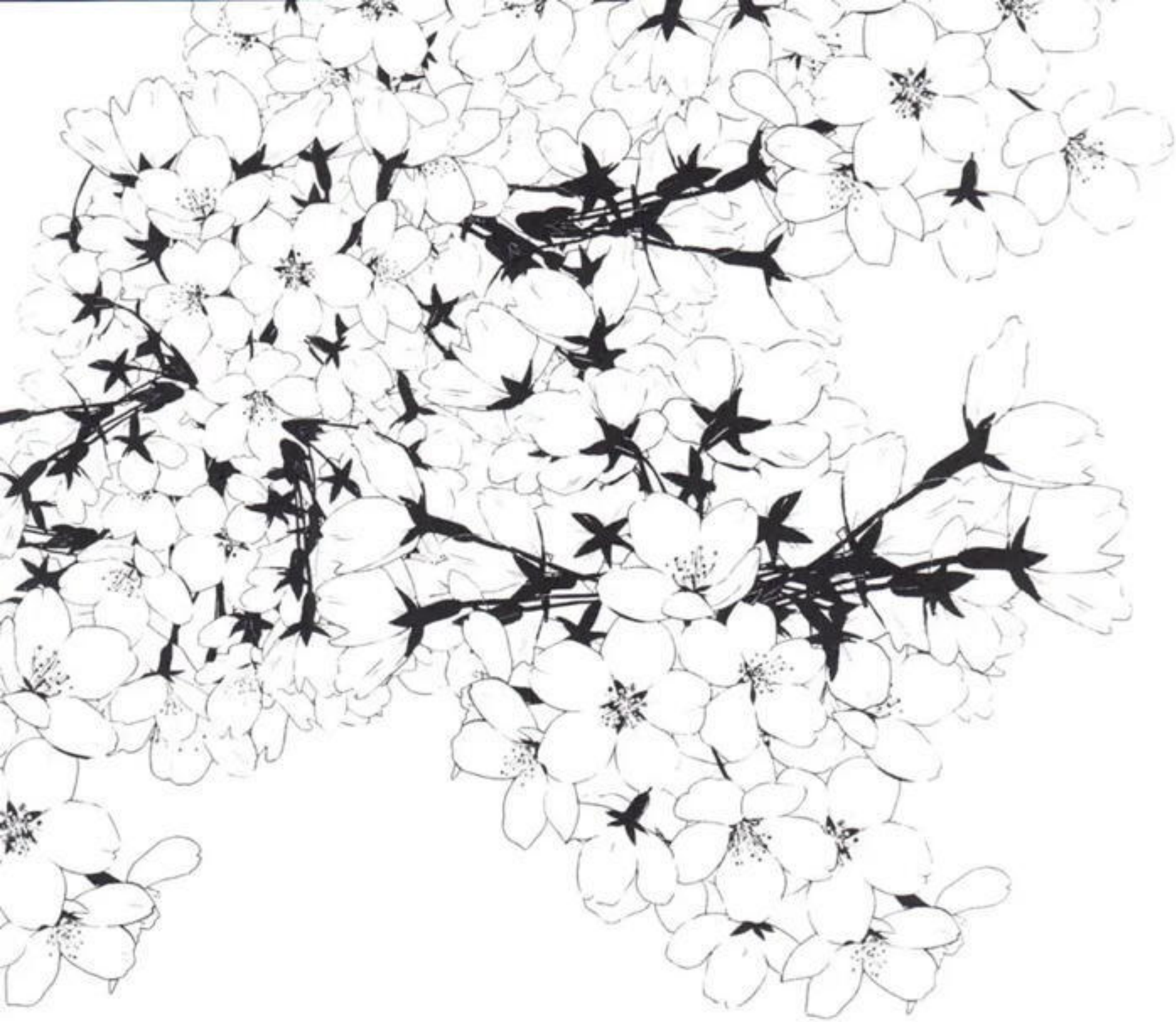
シンジとカヲルの関係性に置き換えて読み取れるようにしてあるので、
だいぶ、妄想というか捏増色強くなってしまいました；

次の劇場版でどうなるかは分からないシンジ君とカヲル君の未来ですが、
全ての終わりに、幸せであってほしいなと思います。

それでは、

ここまで読んで頂きありがとうございます。

2013/03文月路亜



そうかい？

1年後の再会時に
カヲル君の髪が伸びて
魔カヲルくらいになってるって。

髪伸びたね



鉄錆Tetsu-Sabi
文月路亜

HP:<http://t-s.fem.jp/>

MAIL:tetsu-sabi-hr@mail.goo.ne.jp

PIXIV ID:468676

TWITTER ID:roahuduki

発行：2013/03/17

印刷：くりえい社

禁ネットオークション・禁無断転載

